

巨道空二

ILL. Maruto!

魔法少年少女

MAHOU
SHONEN
SHOJO

みくと!?

MIKOTO !?

立ち読み版(体験版)

TSしないと戦えない、魔法少年少女!
全三話中、第一話を全部。
第二話、第三話は序盤
を収録しています。

魔法少女なんし無理だよっ!？」

魔法少年少女みこと!?

第一卷

巨道空二・Maruto!

第一話 少年、少女になる

1 金のヒヨコと黒い獣

2 少年↓少女

3 男装少女

4 女体の神秘童貞少女

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

1 第二の怪物

2 触手怪物のエロ攻撃

第三話 強敵は、魔女

1 女幹部ガーベラ

2 穴底の戦い

第一話 少年、少女になる

※本作品は立ち読み版（体験版）です。

※商品の評価にのみご利用ください。

※商品の一部の紹介となります。

第一話 少年、少女になる

第一話 少年、少女になる

1 金のヒヨコと黒い獣

白いランニングシャツは自転車を漕いできたせいで、湿り気を帯びて肌に張り付いている。早くも呼吸が通常のものになっているのは若さと鍛え方の両方だろう。健康的なツヤを感じさせる肌は健康そのものだ。

(ううっ)

瞳の動きが定まらないほどに動揺していた。問題は、シャツの下で見覚えのないモノが呼吸とともに上下していることだ。

目もとが赤くなったまま髪に手をやっているのは、十代後半の若い女性。髪がナチュラルショートなので中性的な印象もあるけれど美少女とっていいだろう。若干幼い雰囲気顔立ちが印象を柔らかくしている。

「どうしよう……」

下着の襟ぐりからは窮屈に布地に押し込まれた二つの膨らみがしっかりと谷間を作っている。それは、おっぱいというか、バストというべきか。巨乳と言われても不思議ないほどの発達を遂げた乳房が、そこには確かにあった。

下に視線を向ければ、トランクスがなめらかなお腹から下腹部を覆っている。ち

第一話 少年、少女になる

よつと緩くなって、お尻にひっかかっている感じでちよつときわどい部分まで下腹部のふくらみが見えてしまっている。

(ううっ。やっぱり、ない。ぼくの……)

下腹部をトランクスの上から探ると、ほとんどなんの抵抗もなしに股間部分にまで手が動いてしまう。男の象徴がないのは当たり前、といわんばかりの自然な動きだった。

そして、トランクスからはみ出ている、柔らかくすべすべした太腿。傷一つない、健康的な肌は柔らかいくせに弾力があって、いつまでもなで回していたい欲望に駆られる。

「なあ、キンケイド。ぼくを男に戻してくれっ」

つい数十分前まで確かに男だったみことは情けない顔でハンガーにかけてた学生服に目をやった。そこには、黄金色の艶のある羽毛で身をくるむヒヨコが顔を出していた。

「みこと。いい加減納得してくれよ。時間が立てば男に戻れると言ってるだろう」

「すぐに戻れないと困るんだよっ」

そう。鷹月みこと少年（今現在進行形で少女だが）は、ある生理的欲求にかられていた。

第一話 少年、少女になる

(ちくしょう。こんなことになるなら、契約なんてするんじゃないかなかった……)

下腹部にせつない感覚がある。膀胱におしっこがたまってしまったているのだ。

(女の子のトイレって、どうやるんだよ。紙で拭くらしいけど……)

トイレに腰掛けての一連の作業を考えるだけで恥ずかしい。情けない。困惑を深める少女の顔に羞恥が朱を散らす様子は、本人の意思とは関係なしに蠱惑的なほどに美しい。

ちよつとクセのある髪は焦げ茶色。

(ぼ、ぼくは男なのにつ。こ、このままじゃ……)

漏れちゃう。その一言が口に出せないまま、女になってしまったばかりのみことは悩み続けるのだった。

(ああ、まだ男だった夕方あの瞬間に戻りたいっ)

第一話 少年、少女になる

夕日が照らす、緩やかな下り坂を学生服姿の少年たちが歩いていく。一人が自転車を押しながら。もう一人は自転車通学の許可が下りないのか、歩きでの帰宅らしい。

はあ、とため息をつくのは小柄な、自転車を押している方だ。

「やっぱりケンイチには勝てないなー」

「みことに負けてたまるかよ。おれは一応レギュラーだぜ」

自転車を押しながらぼやく道連れに長身の学生が応じる。部活が終わって帰路についた二人の男子生徒はかなり対照的だった。

いかにもスポーツマンといった体格のよいケンイチと、細身で小柄なみこと。ケンイチのスポーツバッグのタグを見れば彼らがサッカー部であることも見て取れる。

自転車の荷台に固定されたスポーツバッグのタグには、鷹月と書かれていた。鷹月みこと。それが小柄な少年の名前だ。

学生服が今一つサイズが合っていないように見えるのは、成長を見越して大きめに作ってあるのかもしれない。襟をしっかりと留めているのが生真面目さを感じさせる。

第一話 少年、少女になる

「そりやぼくは補欠だけど、やっぱり悔しいじゃん」

部活でも一緒に練習することの多い二人だが、どうしても体格で勝るケンイチが有利なのは変わらない。

もう少しの差でなかなか試合に出ることのできないみことだった。口をとがらせる様子はちよつと童顔だがなかなか整った顔立ちで、鳶色の瞳と焦げ茶の髪が優しげだった。

「みことは文化祭とか体育祭じゃあ、レギュラーじゃんか」

「あんな女装イベント、全然うれしくないよっ」

みことが悔しそうに手を握りしめるのに、ケンイチは肩をすくめて見せる。

「しょうがないだろ、みこと以上の素材がいないんだから」

うう、とうなりながらうつむく少年の首は細い。ほっそりとした体格だけでなく、完全な女顔なのはみことの大きなコンプレックスだった。文化祭のミスコンではエントリーしなくても普通に投票、集計されて特別賞が授与されてしまうし、体育祭でも必ず女装枠として実行委員から指定されるレベルだ。

「あきらめろ。みことはそういうキャラなんだから」

「キャラとか言うなよ。ぼくにとつては終わらない黒歴史なんだぞ」

ジト目でケンイチをにらむみことだったが、このシチュエーションに慣れていな

第一話 少年、少女になる

い他の男子では赤面ものの光景だった。

(うわ、なにあれ、うらやましい)

そんな言葉を実際につぶやく若者もいる。

スポーツマンの学生が男装のボーイッシュな彼女と談笑しているように見えても不思議はない。実際、時々振り返る人もいるくらいだ。

「ほら、またなんか言われてる。ぜったい女と思われてる」

男装の麗人としか見えなレベルの、「男の娘」と本人のいないところでは囁かれる艶姿だ。やけにツヤのあるナチュラルヘアも、ベリーショートの子に見えるてしまう理不尽さだった。

「みことはそうかもしれないけど、ジッサイ似合っているからなあ」

唇は薄め。きれいなピンク色で、かすかに受け口なのが見るものをドキリとさせる。鼻はすっきりとしていて、小鼻が控えめで上品だ。

大きめの目、きらきらと光が飛びそうな瞳。眉もくっきりとしながらも緩やかで、頬はもともと艶のある肌がかすかに紅潮している。さらに卵形の輪郭からほっそりとした首筋に続いていく。

まあ、要は女装の必要すらくなく、素のまま女の子として認識されかねない女顔というわけだった。しかもかなりの美少女だ。女の子としては綺麗と可愛いを兼ね備

第一話 少年、少女になる

えた、正当派の美少女といえる。

自転車のハンドルを握るほっそりとした指に力がこもる。身体の個々のパーツも小さめにまとまっていて骨格からして華奢なつくりなもの、女の子然とした雰囲気、を強調してしまっていた。

「似合っている、か……」

口惜しそうに唇をかむ様子も、活発な女の子にしか見えない。

「その、似合っていると云われるのがイヤなんだよっ」

いつもの会話なのだが、細身の少年にとっては深刻だ。鷹月みこと。小さい頃から変身ヒーローに憧れロボットのおもちゃで遊び、棒を持つては剣だと言いはって友達や親戚のお兄さんたちと戦いにあけくれた、立派な男の子だ。

父親こそ幼いころに亡くしているが、伯父たちが男らしさは十分に教えてくれた。母親や姉たちは女らしさも教えてくれようとしたが、それはまさしく少年の黒歴史で、今もお継続中だった。

「はははっ。おれが女装しても似合うって言われるぞ。一緒じゃないか」

ケンイチは中学からのみことの親友だ。みことだけじゃ可哀想だからと女装メンバーに立候補して道連れになってくれたこともある。

だが、それはケンイチの男を上げただけに終わった。女装して当然と言われるみ

第一話 少年、少女になる

ことにはどうにも納得がいかない。

「ケンイチの似合っているのは別の意味だろ、ぼくの方は……」

ケンイチは身長も十分に高く、学生としては発達した筋肉の持ち主で間違っても女装が似合うわけではない。

あくまでも、みことの対照キャラとして「女装男子として似合っていた」のにすぎず、友情を重んじたケンイチの男っぷりを下げはしなかった。

「大丈夫。日向はそんなこと気にしてないぞ」

日向翔子。今年は久しぶりに同じクラスになった同級生の女の子だ。日向翔子は同じ環境、美化委員として時々一緒に行動するだけだが、それだけで心臓がバクバクするのが止められない。

久しぶりに、ということかも知るやうに小さい頃からの知り合いであり、行ってみれば幼なじみに近い。

「日向さんは……関係ないだろう」

気になる女の子の名前を出されたみことの声が小さくなった。

中学校の入学式の時、セーラー服姿の彼女は以前の元気すぎるくらいに元気な「シヨーコ」じゃなくて、「日向さん」と名字で呼ぶしかなかった。

名字で呼ばれた少女が戸惑いながら、ちよつとだけ照れを浮かべてやはり名字で

第一話 少年、少女になる

呼び返してくれたとき、心臓が跳ね上がった気がした。

「ごめん。言わない約束だったな」

あれからもう何年も立つのに、何の進展もないのはお約束だ。親友のケンイチは他人にバラしたりはしないが、誰かに知られやしないかとビクビクしている鷹月少年だった。これ以上周囲に面白がられるのはごめんだ。

「それと、みことはケンカだって弱くないだろ？」

「この顔で舐められたくないからね……って、ごまかすなよっ」

みことは格闘技を直接習ったことはないが、田舎の親戚たちには道場経営している強者が複数おり、田舎にいくたびに反吐を吐くほどしごかれるのが常だった。伯父たちにしごかれたタフさと俊敏さは、みことの数少ない自慢だ。

「だいたいケンイチは昔から……」

信用できると同時に、報復を恐れずにみことをからかう数少ない存在だ。親友とまで言えるのは、この憲一ただ一人かもしれない。

中学に入ったころには体格もほとんど変わらなかったくせに、一人だけ抜け駆けして成長した裏切り者でもある。

(こいつみたいな身体や顔だったらなあ)

顔つきだって、みことみたいな細い顎じゃなくて、男らしい頑丈そうな顎だ。眉

第一話 少年、少女になる

も太くくつきりとして、意志が強そうにみえる。

中学でつるんで遊んでいたころは身長も腕の太さも変わらなかったのに、ずいぶん差がついてしまっていた。

ケンイチはずるい。そう文句をいってやりたいのに、彼の笑顔はそんな小さな嫉妬が恥ずかしくなるくらいに、明るく屈託がない。

こんなさっぱりしたところもうらやましいと思ってしまう自分を変えたい、と少年は思う。

「へへ、おれは昔からこうだぞ。って、どうかしたか？」

誰かに呼ばれたような気がして、みことは後ろを振り返った。いつもの帰り道で、変わったことはない。それなのに、誰かが呼んでいるのがわかる。

「うん。あれ？ えーと……」

きよろきよろと周囲を見渡しても、特に変わったものはない。ナチュラルカットの髪に指で触れながら、小柄な少年は怪訝そうな表情をうかべた。

自転車を押す手が止まり、ラチェットの小さな音も足と一緒に止まった。

「どうしたんだよ、みこと？」

「うん。誰かに呼ばれたような気がして」

夕刻の道路は、いつも通り学生たちやサラリーマン、そして買い物袋を手に提げ

第一話 少年、少女になる

た女性の姿がぼつりぼつりといった感じだ。

中心市街地から少し離れば、あつという間に緑が増え、人が減るのが地方都市だった。

「誰もいないぞ。気のせいだろ。そんじゃ、オレはここで。また明日な」

「おう、バイバイ。また明日な、ケンイチ」

自宅が近い憲一少年は、自転車通学の許可がない。わずか1キロメートルほどの差だが、みことは自転車通学許可証がある。

同じ部活の長身の友人と別れてから自転車に乗って帰宅するのが、ほっそりとした少年の習慣だった。

夕刻の冷気を含んだ風が部活動の熱気の残る肌をくすぐる。

「んー、どうも気になるんだよなあ」

自転車のペダルを踏みながら、ハンドルを大きく切って道に戻る少年は学生服のカラーを外し、熱気を逃がした。

写真の心得のあるものなら、この場にカメラを持っていなかったことを後悔しただろう。たったそれだけの動作が絵になる少年だった。

「確かに……聞こえたんだよな」

第一話 少年、少女になる

斜光が少年の表情を立体的に浮き上がらせていた。

形よくまとまった鼻、上下のバランスがよいながらも薄目の唇。綺麗な卵形の顔の輪郭、そして眉はくっきりとしていながらも、柔らかい弧を描いていた。まつげが風に震えるのが、望遠レンズを通して見えるかもしれない。

そして何より、ぱっちりした目は黒々とした大きな瞳が光を放つようで、心配そうに路上に目を配る伏し目がちな表情が逆光に浮かび上がるポートレート写真みたいだった。

「このへんだったよな」

自転車を降りたみことはスタンドを立て、あたりを見渡した。このあたりは昔からの旧市街と、田んぼをつぶして作られた新市街の中間点だ。その境となる川のコンクリートで固められた岸に、何か小さなものもこもこ動いている。

（時期はずれだけど、子猫？ 黄色？）

黄色いもふもふした毛玉をそっと持ち上げると、予想が間違っていたことがわかった。ちよつと大きい気がするが、ヒヨコだ。手の中で確かに暖かさ、呼吸をしているらしい命の動きが感じられる。それだけで、ちよつとホツとした。

（鳥のひなって、初めて見た動くものを親だと思っただけ……って、ええっ）

ヒヨコには間違いない。確かにヒヨコなのだが。露天などで見かけるカラーヒヨ

第一話 少年、少女になる

コなどと違つて、びっくりするほど綺麗な艶のある羽毛にくるまれている。

(もこもこしてるけど、これ何の鳥の雛なんだろう？ って、何これっ？)

もぞもぞと動くヒヨコは、メガネをかけていた。目をしばたたかせる少年の手の中で、高級なぬいぐるみのようなヒヨコは、なぜかサングラスをかけていた。

「う、ううっ……ここは……どこだ……」

しかも明らかな人語を喋っていた。声は低めの男声。それだけで、少年の頭の中が真っ白になってしまったのは仕方がないかもしれない。

川岸に自転車を止めたままの少年を怪訝そうに見る人もいないではないが、どうやらヒヨコの言葉は聞こえなかったらしい。

「ここは、貴船市だけだ。大丈夫、怪我してない？」

鷹月少年はなかなか大物だった。思考そのものは停止しているが、対応はできているあたり、実用的な人間なのかもしれない。

「だ、大丈夫だ。お、お前は……こと？」

小さな翼を広げ、首を必死に曲げてサングラスを直したヒヨコが手の上から少年を見上げた。やけに人間くさい仕草だった。

「うん、ぼくはみことだけだ」

「に、逃げろ。追っ手が……」

第一話 少年、少女になる

そこまで言ったものの、体力が続かなかったのかヒヨコはブルッと体を震わせてぐったりとしてしまった。生きてこそいるものの、だいぶ弱っているようだ。

「追っ手って……！」

ぞくり、と背筋に冷たいものを感じた少年は自転車に向かって跳躍した。手の中の小さな生き物をポケットに滑り込ませ、スタンドをあげるのもどかしくペダルを踏む。

ビュッ、とかすかな風音が鼓膜を震わせた。背後からの迫力ある音は、何か重い、大きなモノがついさつき少年がいた空間を貫いた音だった。

「な、なんだよ、これっ」

学生服のポケットの中のヒヨコは答えない。答えられないほどに弱っているのか。視界のすみに、何か黒い影を見つけた少年はギアを一気に高速に入れ、立ち漕ぎで加速する。

まだ暗いわけではないし、人通りだってある。人の多いところに出ようと考えた少年は愕然とした。

「だ、誰も……いない？ そんなっ」

帰宅ラッシュの時間こそわずかに外れたとはいえ、自動車だって歩行者だってかなりあるはずの時間だ。

第一話 少年、少女になる

それなのに、街には風に吹かれる街路樹以外に動くものは何一つない。少年の後ろから迫る黒い影を除いてはだが。

それだけじゃない。世界が灰色で塗りつぶされている。いや、みこと自身には色が残っている。今漕いでいる自転車もだ。

それなのに街路樹も夕焼けの空も、あらゆるものが白から黒までのグラデーションで表現されている。色が消えているのだ。

（やばい。何かやばい！）

ぐいぐいと、部活で鍛えた脚力で加速していく。

少年の漕ぐ自転車は高級品ではないが、多段変速のスポーツタイプだ。かなりのスピードが出ているのに獣を引き離すことはできない。それどころか足音が近づいてくるようだ。かすかな獣臭さにゾクリとする。

（なにが……起こっているんだ？）

全身の皮膚が冷たく、逆立ったうぶ毛がびりびりと震えるようにして危険信号を関知していた。何か尋常でないことがおきているのは間違いない。

焦る少年の視界に人影がひとつ入った。安堵感と同時に、全身に冷水を浴びたような衝撃に、思わず叫び声が出ていた。

「やばっ……逃げろ、ケンイチっ」

第一話 少年、少女になる

先ほど別れた級友が立ち尽くしている。いや、「停止」していた。

機嫌よさそうにスポーツバッグのストラップに手をかけたまま、ピクリとも動かない。みことの声にももちろん気づかないまま、交差点で凍り付いている。

「なにかヤバそうな奴が追ってくるんだよっ。おい、動けよっ」

級友の口元も、瞳も、凍り付いたように動かない。まさか死んでいるのか。そんなことはないと直感が告げている。何かに「停止」させられているのだ。このまま放置してあの獣にやられたら、本当に死んでしまうだろう。

色彩こそ失っていないものの、ケンイチはまるで人形のように動かない。無理に動かそうとすれば倒れてしまいそうだ。

「く、くそっ。逃げられない……のかっ」

自転車を乗り捨て、友人の手を引いて駆け出そうとする少年は初めて追っ手の獣と対峙した。動物は普通、体重が強さにつながるといふ。人間は例外で、自分の半分の体重の獣に勝つのも難しいと聞いたことがある。今、目の前にいる黒い怪物はみことの倍以上の体重がありそうだった。

「グルルルッ」

低く、お腹に堪えるうなり声。牙をむき出した顔はヒョウのようだ。しかも大きい。大型犬が子犬に見えてしまいそうな、圧倒的なボリューム感。あまりの迫力に、

第一話 少年、少女になる

思わず腰が引けてしまう。

「く、来るなっ」

獣の前に立つ少年は武器を持っていないのが悔しかった。武器があってもかなわないかもしれないけど、何かあれば立ち向かえるかもしれないのに。この色のない世界では、動けるのが自分だけで助けも来そうにはない。

「シャアアッー！」

体当たりするかのように低く跳躍する獣の前で、思わず目をつむってしまった。ことはわき腹のあたりに熱を感じた。その瞬間、直前まで迫っていた獣が悲鳴をあげて跳びのいた。目を開けるとその肩口に、何か槍のようなものが刺さっていた。

「ギャオオツ、グアツ、オオオオオオツ」

傷を負いながらも怒り狂う獣のギラギラと光る目が少年を……いや、少年の着る学生服のポケットをにらみつけている。

（これって、もしかして……）

そこには、もちろんアレしかない。ポケットに目をやった少年の目が点になった。

「へへっ。巻き込みまっすまねえな。このまま逃げるといい」

ポケットから顔を出したヒヨコがよじよじとポケットをよじ登りながら、ニヤリ

第一話 少年、少女になる

と笑ってみせる。いや、サングラスごしに、しかもくちばしで笑えるのかとはみことも思うのだが、とにかくニヒルに笑ったのだ、このヒヨコは。

「お前は一緒に逃げなくてもいいのかよっ」

そう訪ねる学生の前で、ヒヨコは宙に浮いていた。小さな翼が光をはらみ、羽ばたきのひとつごとに光の矢が獣に向けて放たれている。

だが怪物は素早くそれを避けた。近づいてくるネコ科の猛獣そっくりに見えた。黒ヒヨウ。それがイメージに近いかも知れない。

「あ、あぶないぞっ、おいっ」

みことが手を伸ばした目の前でドスン、と重量物同士がぶつかるような鈍い音が響いた。毛皮に包まれたしなやかな獣の身体が目に見えない透明な何かに阻まれている。そこに何か、白い、いやかすかに光る粒子のようなものが無数に見える。

「グオオオオッ、グルルルル——ッ！」

「あんた、何してるっ。早く逃げろっ」

ヒヨコの羽ばたきとともにさらに放たれる光の矢を避けた獣が襲いかかってくるのも、ヒヨコの正面に浮かび上がる光の壁に阻まれる。

(よくわからないけど、このヒヨコがなんとかしてくれているのか)

だが、ヒヨコの表情だけで状況がよくないのは見当がつく。もともと弱っている

第一話 少年、少女になる

ヒヨコは長くは保たなそうだと、なんとなくわかった。

「くっ……契約者もない状態じゃ、逃げてても無駄さ。部外者は逃げてくれ」

ヒヨコのサングラスの下の、つぶらすぎる瞳が真剣なのがわかる。ヒヨコのくせに、生意気にも人間様を助けるのに命をかけようとしているのだ。

思考停止状態なのに、なぜかみことにはそれが理解できてしまう。

「契約者がいたら、なんとかなるのか？ それならぼくが……」

どのみちケンイチを置いては逃げられない。見知らぬヒヨコだって、見捨てるのははばかられる。一人だけ逃げることはみことの頭にはなかった。

「契約……って本気か……って、マジかよっ、これ」

少年に向けられたヒヨコのサングラスがかすかな光とともに、音をたてて割れた。黒い獣の爪が光の壁に食い込み、ビリビリと空気が震えている。みことに向けられたヒヨコの目が、あんぐりと開いたクチバシがその驚きを物語っていた。

「どうしたんだよ、ぼくはケーヤクできないのかよっ」

「い、いや違う。この空間で動けるから、もしやとは思ったが……」

翼をはためかせ、黒い獣を牽制しながらもヒヨコは冷静さを取り戻していた。どうやら、このナゾの生き物は色を失った世界のこともわかっているようだ。

「あんた、条件オールクリア、適性トリプルAだっつよ。契約、マジでしてみる

第一話 少年、少女になる

か？」

「よくわからないけど、それでなんとかなるならするぞっ」

「よく言った。オレの残りの力、あんたにくれてやるっ」

サングラスの割れた、小さな目と視線があう。その瞬間、ヒヨコの名前がわかった。キンケイド。それがこのヒヨコの名前だ。守護獣、いや守護鳥で、戦士たるものを導き補佐する存在。そのキンケイドの記憶とさまざまな知識が流れ込んでくる。

(これが、契約……！)

契約者には世界を守る力と、それにふさわしい姿が与えられる。守護獣と契約を結び魔力をつないだ者は守護者となる。普段とは違う戦いのための戦装束に身を包み、敵と戦うのが契約の内容のひとつだった。

(へ、変身ヒーロー？ あ、あまり恥ずかしい格好はちよつと……)

そんなことを言っている間にも獣の爪が、牙が光の壁に食い込み、じりじりと亀裂を広げていく。ヒヨコの声にも焦りが浮かんでいた。

「うだうだ言っている暇はねえ。今はただ一言、受諾と言えっ」

「わ、わかった……僕は契約を……受諾するっ！」

この色彩のない世界で「停止」しているケンイチがいる以上、逃げるわけにはいかない。

第一話 少年、少女になる

男として生まれた以上、いつかは決断しなくてはいけない時が来ると教えられてきた。きつと今がそのときだ。大きめの瞳が強い意志を込めて輝いた。

「そうだ。それでいい。あとはふさわしい姿が与えられるはずだ」

どこから現れたのか、大きな風切り羽根がひとつ、少年の前で光を放つ。キンケイドの羽根だと、なんとなくわかる。

（うわ、すごい立派な羽根……すごい、綺麗だ）

キンケイドは、本当はもっと大きな鳥なのだろう。次の瞬間、ふわっと体が浮き上がる感覚があった。その前で、金色の風切り羽根がほどけるようにして光の束になり、みことの周囲を回り始める。

（戦いにふさわしい姿……ええと、仮面なんとかとか、なんとかレンジャーとか……）

なんとなく目をつぶって、変身ヒーローたちのバトルコスチュームを思い浮かべる。武器を装着したベルトとか、光を反射して輝く仮面とか。もちろん、素顔がわからないのがヒーローだ。正体はわかっちゃいけない。

（なんだっていいや。今、こいつやケンイチを守れるならっ）

手に、足に力が湧いてくる。体の奥から、あふれるほどの力が全身にいきわたるとともに、腕や脚を力強さが覆っていく。出現したコスチュームが瞬間的に熱を持

第一話 少年、少女になる

ち、すぐに体になじんでいくのが不思議な感じだった。

「よーし、オーケーだ。いけっ」

「わ、わかった」

キンケイドの叫びに年若き戦士が目を開く。契約によって伝えられた記憶の中に、ある程度は戦い方も入っている。実戦経験はないけれどできないことはないはずだ、と自分を鼓舞する。

（いくぞっ。あの黒いのを、やつつけるっ）

何より、親友やたった今まで自分たちを守ってくれていたキンケイドを助けることがのできるのだと、精神が高揚している。体が軽く、ふわりと地面に降り立つ動作もうまく決まった。ひらりと風をはらむスカートに気を使いながら構えをとる。

目の前で、黒いヒョウのような獣が様子を窺っている。新手の敵を警戒しているらしい。えっ……スカート？　一テンポ遅れて、疑問符が浮かんだ。

（スカートって、なんだ？　戦士にふさわしい姿って……）

ようやく思考能力が戻ってきたみことの脳内に疑問符が浮かんだ。高揚感こそ残っているものの、頭のどこかが情報の受け入れを拒否していた。

「え、ええと、キンケイド……」

怖くて、それ以上聞けない。だが、サングラスのヒョコはあっさりと引導を渡し

第一話 少年、少女になる

てくれた。綺麗な笑顔を添えた、低めのさわやかボイスで。

「よく似合っているぜ。がんばってくれよ、お嬢ちゃん」

ぴきっ。頭の中で何かが鳴った。髪の毛が逆立ちそうな勢いでみことは叫ぶ。

「ぼくは……男だ——っっっ」

第一話 少年、少女になる

2

少年↓少女

足下に目をやればショートブーツにタイツ。我慢できないことはない。可愛いデザインだが……その、タイツの色がピンクなのはどうなんだろう、と少年は真剣に悩む。

腕を覆うスリーブはブーツと同様に縁取りのあるデザインで、開口部の膨らみがアクセントを添えている。

(えーと、かっこいいというよりはかわいい系か……ここまではまだ許せる)

ここまでは、なんとかなる。色がピンクなのをなんとかすれば、なんとかなる。

いや、この場合はスリーブよりはアームカバーというのか。それとも……。いやいや、問題なのはこれからだ。

(でも、ここからはまずいだろっ。絶対まずいたろっ)

襟元から胸元にかけてはオープン部分があるのも、衣装によってはあるかもしれない。だが、とみことの理性がおののく。

半透けでおへそが覗いてしまうお腹。腰の細さを強調するスカートのデザイン。

第一話 少年、少女になる

これは我慢してはいけないと、男としての心が、自尊心が全力で主張していた。マントの下に隠れているけれど、背中だって半分くらい覗けてしまっていて、なんとというか、無防備というか頼りない感覚に首筋がむずむずする。

（な、なんだよ、これ。これが……ぼくにふさわしいって……）

可愛いのは、わかる。デザインとして、組みあわせとして統一感もある。口惜しくも女装させられ慣れてしまっている少年として、生地レベルも、デザインも縫製もしっかりしていることがわかってしまう。

でも、そういう問題じゃないのだ、これは。

（しかもいろいろきわどいしっ）

無防備すぎる背中。実際にはないとはいえ、多少あるかもなデザインの胸元。そして、ふわりとした印象のスカートはかなり短めで、タイツから覗ける内腿の素肌が挑発的だ。

……誰に対して挑発的なのかは考えたくもなかったが。

襟と一体化したデザインのマントは小さめで、可愛いけれど実用性は皆無だろう。

（なんだよ、これ。ぼく、何か悪いことしたか？）

口惜しくも小さい頃から女装慣れしてしまっているみことの目から見ても、よくできている衣装だし、可愛くできている。でも、どうみても女の子向けアニメのヒ

第一話 少年、少女になる

ロインとかのコスチュームだ。

そして、この姿を見たものだれもこう呟くだろう。似合っている、と。

人によつては「ありがとうございますっ！」と天に向かって雄々しく叫び、天に拳を突き上げることだろう。男の娘万歳、とその趣味の男女が歓喜の声をあげそうなほどに。

（けっきょく、ぼくはこうなるのかよつ。こんな、マジな場面ですらつ）

ただでさえほっそりとした手足、凹凸が少めな目な身体はコスチュームのスカートデザインのみにみごとに隠されている。

胸元こそぺったんだがプロテクターがサポートしていて、ちよつとはありそうに見えるのがポイントだ。髪の色も栗色に変わっていて、遠目にはみこととはわからないだろうことだけが救いだつた。

（せつかく、男らしいことができるかと思つたのに……）

がつくりとうなだれるみことだつたが、状況は少年の感傷などを許してはくれない。

みことの戦力を見定めたのか、凶暴なうなりを上げながら獣が近づいてくる。間合いに入った瞬間、驚くほどの跳躍で突進してくる。

「シヤアアア——ッ！」

第一話 少年、少女になる

「お、おいつ。来るぞっ」

キンケイドに言われるまでもなく、身体が動いていた。

ヒュオツ——！

黒豹のような怪物のツメが風を切るのを小さなステップでかわしていた。

（あ、身体が軽い。いつもより、キレている感じだ）

方向転換した獣が襲いかかるのを横跳びにかわし、後ろを取った状態から獣の首筋に蹴りを入れる。

「とおっ」

正式に習ってこそいないものの、年に幾度か伯父たちによるしごきをうけている身体は、細身ながらも俊敏さは目を見張るほどだ。

分厚い筋肉の固まりを打ち据える鈍い音。反動でバランスを崩しつつも手をつきながら着地する。

——グオオオツ——

怪物が吠えた。苦痛と怒りの吠え声が大気を震わせる。手応えはあるが、一撃で倒せるものではないだろう。

その一方で、自分の足にダメージがきていないことを確認する。痛みも、不自然な感覚もない。

第一話 少年、少女になる

(防御力もあるみたいだ。でも、戦う男に、これは……絶対に、ないっつ) 涙目になりながら、女装少年はひらひらする衣装をはためかせて跳びすぎる。

(スカートの丈、短すぎだろっ。見えちゃうぞ、これっ)

かなりミニのフリfrisスカートはご丁寧なことにフレーム入りなのか、常に美しいシルエットを保っている。

グルルルッ!

一方の獣が牙を剥き出し、なめらかな動作でこちらにむかって脚を進める。ガリガリと、爪でアスファルトの削れる嫌な音がした。巨体にふさわしい凶悪な破壊力と鋭さだった。一撃うけるだけで、並の人間では行動不能どころか即死してしまうかもしれない。

(でも、そんな簡単にはやられないぞっ)

みことの動きは軽やかで、獣の攻撃を鮮やかにかわしていく。サッカーで鍛えられたステップが役に立ったのが嬉しい。

地道な練習の成果はあったようだ。ほっそりとした脚はしなやかな筋肉を秘め、小柄な少年に驚くべきスピードを与えている。

「さすがだな。魔力容量がでかいだけのことはあるぜ」

サンガラスのヒヨコが感心したようにつぶやく声が、契約でつながっている少年

第一話 少年、少女になる

の心に伝わってくる。そこには衣装がよく似合っている、という感想がすっかりと入っていて、どこかに消えてしまいたくなくなった。

キンケイドの思考にはご丁寧映像情報まで入っていた。決定打こそ与えられないものの、時には攻撃に転じ、幾度も凶獣の背中や首筋に打撃を加える女装少年は、傍目には最近のヒロインアニメのヒロインが戦っているようにしか見えない。

それも、可愛らしくもなかなかきわどいコスチュームで、だ。

(ううっ。消えたいっ。消えてしまいたいっ)

情けない。心底情けなかった。一世一代の男を見せるときだと考えていた、さっきまでの自分を呪ってやりたい気分だ。親友を守ろうとして死ぬのはまだいいが、女装したままなのは絶対にまずい。

(それって、絶対ホモとかビーエルとかの扱いになるじゃないか)

コスプレ女装マニアの上に同性愛者と決めつけられるのは、人生どころかなにか根本的な人間としてのソングンがやばい。やばすぎる。というか、ただでさえやばい上の姉が本当にやばくなってしまおう。

(くそっ。ぼくは技術のツヤツヤ先生じゃないんだからなっ)

ガチだというウワサのある技術教師のことを思い出す。体格がよいスポーツマンタイプの生徒に不必要に近づくというウワサだ。

第一話 少年、少女になる

化粧をしているらしく、いつもやけにツヤツヤしたほっぺが特徴的な、それでも意外と人気のある先生だった。

別に、同性愛者のことをどうこういうつもりはない。同性同士で好きになってはいけないといっても、実際に好きになってしまったらしょうがないのかもしれない。

(でも、ぼくはホモでもゲイでもビーエルでもないからなっ)

そう、みことはちがう。見かけは女みたいと言われようとも、男の心意気だけは失いたくないと思っている。

(こんな格好、お姉ちゃんたちに見られたら、えらいことになるし)

みことの女装はもともと姉たちのお下がりを着せられていたことが原点だ。幼いころは性別などあつてなきに等しいし、本人もわかっていなかった。

成長するにしたがつて羞恥心と男の子としての自覚が芽生え、数年前から家族からの女装の話は断るようになっていくわけだが、もしこのまま服装が戻らないまま家に帰ったりしたら姉たちの興奮は想像したくないレベルだ。

(もしぼくが今死んだら、女装少年、謎の事故死とかになるのかな)

この、やけに可愛い衣装を身につけたまま、警察とかに写真を撮られたり、学校とかで噂されるのを想像するだけで全身が総毛立った。

それだけはイヤだ、と呟きながら武器を探す。襟元と一体化したマントは鳥の翼

第一話 少年、少女になる

をイメージしたデザインで、ここに手裏剣のような武器があると、契約で流れ込んだ知識が教えてくれる。

(ええと、こうして……って、出ないぞ、おいっ)

マントを翻し、羽毛が抜き取るイメージと動作をしても、武器は出てこない。思わず間抜けなポーズをとってしまったところに凶暴な獣の爪が迫る。サイドステップでかわしながら、ヒヨコに向かって叫ぶ。

「キンケイド、武器が出ない。なんとかしてくれよっ」

「ん、お嬢ちゃんの魔力レベルならほぼ全ての武器が使えるはずだぞ」

ヒヨコに目をやると、ケンイチの肩の上でのんきに毛繕いをしているようだ。

「ぼくはお嬢ちゃんじゃないし、魔力なんてないぞっ」

「はあ……魔法使い以外動けないこの空間で動いてるだろ、魔力は十分……っ？」

極小サイズのサングラスが光った。なにやら発見したらしい。

「お、おい、あんたの魔力、何かおかしいぞ」

「いや、ぼくはもともと魔力なんてないから」

「くっ……なんとかするから、少し待てっ」

体格のいいケンイチの肩の上でヒヨコがあわてているのはすぐくシユールだったが、そちらに意識を向ける余裕は、今のみことにはない。

第一話 少年、少女になる

何しろ即実践というか、実戦だ。怪物の牙や爪を受けたら、ただじゃすまないのは確かだった。

ストーンツ。

幾度目かの攻撃をかわしながら、なるべくケンイチたちの遠くへと獣を誘導していく。

(これで、少しはマシになったかな)

今更間違いだったとかいったら、あのヒヨコを一生恨んでやる、と心に誓いながら獣の爪を、牙をかわしていく。

スピードでは負けていないものの、このままではやっつけることができない。武器は絶対に必要だった。

「ウォルルルツ、オオオオツ」

前脚に捕らえられそうになるのをかわしたと思ったら、猫族ならではの柔軟さで、さらに追い打ちをかけてくる。敵もみことの動きに慣れてきたのかもしれない。

バシィツ！

ツメこそ避けたものの、下肢に獣の前足が触れ、衝撃が意識をゆるする。

「くっ……痛うっ」

ピンクと白を基調にしたコスチュームは意外なほどに防御力が高いようで、衝撃

第一話 少年、少女になる

などのダメージを軽減してくれる。だが、牙や爪は完全には防げない。コスチュームは破れこそしないものの、鋭い先端が食い込む痛みやダメージはゼロにはならないのだ。

「ぶ、武器がないと、勝てないぞっ」

「わかってるっ。今調べてるから、しのいでくれっ」

ヒヨコが腕（小さいけれど一応翼だ）を組むと、どこからかいくつもの鏡が出現した。なにやら呪文をつぶやいているらしい。

（世界を導く精霊、守護者の御霊よ、このものの魔力の流れを……）

鏡には先ほどまでの学生服姿のみことや、たった今、黒ヒヨウのような怪物と戦っている美少女の姿があった。そしてパソコンの画面を一気に流れていくような大量の文字の波。このヒヨコは、やはりタダモノではないようだ。

（くそっ。女装で戦って負けるなんて、イヤすぎるっ）

幾度か鋭い爪を防いだ腕の甲の部分の生地に傷みが出てきていた。普通の布地じゃないのは確かだが、やはり限界はあるようだ。

そして運動部の現役といってもしよせんは人間だ。疲労だつてたまってくる。滑らかな肌がほんのりと紅潮し、汗ばんできたころにはヒヨコの調べ物が終わったらしい。

第一話 少年、少女になる

「おい、原因がわかった。ちいと身体に負荷がかかると、やるか？」

パワーアップにリスクはつきものだ。多少のことに文句は言ってられない。少年はためらいも見せずにならず。すでにコスチュームが淡い光に包まれている。キンケイドもそのつもりでいるのだ。ここで受けなければ、男じゃないと思う。

「もちろんっ。こいつをやっつけないと始まらないだろっ」

「オーケーだっ。受諾せよ、鷹月みことっ」

サングラスのヒヨコがケンイチの学生帽の上で浮き上がっているのは吹き出したいくらい滑稽だったが、今はそんな場合じゃなかった。キンケイドから流れ込む「力」が、契約がみことの「受諾」を求めているのがわかる。

「ぼくは……契約を受諾するっ」

その言葉とともに、キンケイドの魔法が発動した。全身が一気に熱を持ち、筋肉が、骨格が悲鳴を上げる。それだけじゃない。平衡感覚すらもおかしくなり、戦うどころか立っているのもつらいほどだ。

「くっ……」

倒れ込むようにして、怪物の突進をかわす。そのまま低い体勢で敵を窺うのは、今大きな動作をしたら、そのままバランスを崩してしまいそうだからだ。

「負荷が大きいと思うが、最初だけだ。こらえるよ、みことっ」

第一話 少年、少女になる

「あ、ああっ。……しよ、正直、キツイけどなっ」

予想していなかったわけではないが、あまりの激痛に完全に動きが停まってしまった。膝をつき、うつむいてしまう少年は、凶獣の格好の獲物だった。勝利を確信した咆哮をあげながら、膨大な質量の筋肉が大地を蹴った。

「や、やっぱそうなるよな……」

最小限の動きで、避ける。しかも相手と交差するルートでだ。獣の脇をすり抜け、少しでも距離を稼ぐしかない。だが、身体の奥の痛みがひどく、思うように動けない。

(ま、まずいな、これ……でも、負けるもんか)

辛うじて構えたみことに、牙を剥き出しにした獣が襲いかかる。避けきれないのを覚悟した女装少年の目の前で、重量物が堅いものにぶつかる、迫力ある音がした。

「グルルルルッ……ガウウツ、グオオオッ」

光の壁に牙が、爪が食い込み、亀裂が生じるのを、少年は見た。一つ一つが鋭利な武器のような牙が、キンケイドの作り出した障壁を削り、孔を穿っていく。

「時間は稼いでやる。ただ耐えればいい。そうすれば、勝てるからなっ」

ひび割れたサングラスの下でつぶらな瞳が燃えている。めいぐるみみたいなヒョコの翼がプルプルと震えているところを見ると、だいぶ無理をしているのかもしれない

第一話 少年、少女になる

ない。

(そうだ。あいつだって頑張ってる。ぼくだって……)

鷹月家の男子は、こんなことで負けない。伯父たちも祖父も、みんな化け物みたいに強いのだ。みことだって鷹月家の一員だ。きっと強くなれるはずだった。田舎に行くたびに道場に引っぱり込まれて、しごかれてもきた。痛みにだって慣れっこのはずだった。そう自分を鼓舞しながらあの怪物に勝つ自分をイメージする。

「うっ、うっ……」

全身がバラバラになりそうだった。関節が、筋肉が、全身の骨格がきしみを上げ、感覚神経に激痛のバルスを送り込んでいる。だか、歯をくいしばりながら少年は耐える。身体を作り替えられている。そんな感覚があった。

(ぼくは、男だ。父さんの息子だ……こんな痛みに、負けるもんかっ)

父親の記憶は、大きな背中と見上げるといつも微笑んでくれた口元の優しさだけだ。だけど母親はいつも嬉しそうに話してくれる。お父さんは、本当に強くて優しい人だったのよ、と。

腰の奥が熱く、身体の奥底が沸騰しているような不思議な感覚。痛みと、熱さと、ちよつぴりの恐怖を感じながらみことは耐える。母親の言葉を思い出しながら。

(ぼくは負けないぞ。こんなこと……痛みくらいで負けるもんか)

第一話 少年、少女になる

あなたもお父さんのようになりなさい。誰かを守るような強い心を持った人になりなさい。母は幼い男の子を抱きしめ、嗚咽の中でそう囁いた。あの母の言葉に恥ずかしくない男になるのが鷹月みことの基本というか、大本だ。

今度こそ力を手にいれる。親友を、そして短い間でも命をかけてくれたナゾの生き物を守る。その一念が通じたのか、ふっと痛みがやわらいだ。身体の奥、中心部分でなにかがほどけ、全身の苦痛が一気に引いていく。

全身が作り替えられたかのような、清新な、不思議な充実感。さわやかな風が吹き付け、火照った肌に心地よい。激しい運動後の苦痛に耐えた汗も、あつと言う間にで乾いていく。ああ、この風は味方なのだとな納得する自分がいた。

手を握り、軽く脚でステップを踏む。それだけで、先ほどまでとは違った力を身体の中に感じる。体力というか、敏捷性とか、そういったものじゃなくて、もっと奥深い力が自分の中に息づいているのがわかる。全身を重く感じる疲労も苦痛からの回復とともに消えている。

「身体がすごく軽いつ。これなら、もう何も恐くない……気がするつつ」

わずかな助走での、驚くほどの高さのジャンプ。マントが風をはらみ、着地点をコントロールできるのもわかる。そして、先ほどは感じなかった力がマントの中から伝わってくる。今なら使えるという確信があった。

第一話 少年、少女になる

「今度こそ、ライトフェザー……っ！」

小さめのマントが翼のように広がり、いくつもの白く光る羽根が浮かび上がる。そのうち二つだけを、指で挟んで構える。鷹月みことの思考に、意志に肉体が、そしてわき上がる「力」が応える。

つむじ風に巻き込まれたかのように栗色の髪が風になびく。マントが風の中に光をはらみ、構えた二つの羽根が一回り大きくなる。鳳の翼のように広がる布地の下には、肩甲骨の間のくぼみがくつきりと見える。背中の中程まで大きくえぐられたデザインが、背後からも女らしさを強調していた。

「グルルルッ！」

みことの跳躍に気付いた凶獣が大きくとびのいた。先ほどまでとは違うということがわかったのか、様子を窺っている。

ふわり、と黒い怪物の前に降り立った瞬間、夕日の最後の光線がほっそりとしたみことの姿を浮かび上がらせる。

「よーし、これで武器が使えるぞっ！」

斜光が立体感を強調していた。風になびく長い髪はあくまでも柔らかく、先端は風に溶けてしまいそうなほどだ。

くつきりとくびれた腰からプロテクターとふわふわのスカートへとつながり、む

第一話 少年、少女になる

つちりとした太腿がぴつちりとしたタイツにくるまれながらも、内腿の素肌が覗けているのが誘惑的だ。

「これで決めてやるっ」

興奮のせいか声も若干高めだ。光の羽根を手にしたまま間合いをはかるしなやかな腕もいつもより丸みというか、柔らかさを帯びている。そして、胸元は先ほどまでとは明らかに違っていた。

コスチュームに隠されるのかないのか微妙だった胸元が、プロテクターを誇らしげに持ち上げ、ポリウムたっぷりのふくらみがふたつ、呼吸とともにかすかに上下していた。

（やった、今、ぼくカツコイイかもっ）

手裏剣を打つように構えると、はつきりとした谷間がわかる、童顔には似合わないかなりの巨乳っぷりだ。

「グルルツ、シュウウウツ」

牙を剥き出しにしながら向かい合う黒い獣とみこと。背後から見ればふわりと風に浮き上がったマントの下の背中からお尻までの曲線の優美さに目を奪われるだろう。

肝心な部分はスカートの中に隠されているとはいえ、女性らしさを強調したコス

第一話 少年、少女になる

チュームとあいまって、可愛らしいだけでなく、成熟に向かいつつある若い女性の魅力が濃縮されている。

「いくぞっ」

「グルルツ、ルルルルオオオーッ！」

みことが手にした光の羽根を放つのと、大きく体をたわめた獣が跳躍するのはほぼ同時だった。

てつきり自分を狙ってくると思っていた少女の脇をかすめ、凶獣が無防備なキンケイドとケンイチに向かって突進する。

「しまったっ……けどっ」

狙いははずしたものの、光の羽根は矢となって獣の脚に突き刺さり、そのスピードを大きく殺いでいた。しなやかな脚が大地を蹴ると、驚くべき加速で獣の前に出る。

スカートが風をはらみ、太腿の付け根近くまでが露わになるのにも本人は気づかない。

「ケンイチ達には、手を出させないっ」

凶獣の前に立ちはだかったみことは、もう一本の光の羽根を獣の首筋に打ちこんだ。投げナイフやダーツとも違う独特の投げかたは手裏剣の技法の一つだが、なぜ

第一話 少年、少女になる

かとおつきに出てきたのだった。

「グウツ、ウツ、ウウツ——！」

二本めの光の矢を受けた獣の四肢の動きから滑らかさが消え失せ、動力の切れたオモチヤのようにガクガクと震え、崩れ落ちる。

「グルツ、ル……」

爛々と輝いていた、まがまがしいほどに強い光を放つ目がガラス玉のようになり、力を失った巨体がみすぼらしく見える。

「……やったんだよね」

ふう、と深く呼吸しながらも視線は獣から動かない。

「ああ、よくやった。みこと。助かったぜ。……どうした？」

ぱたぱたと小さな翼で羽ばたきながら、金色のヒヨコが肩にとまった。獣に向かって足を踏みだそうとした女装少女の動きは固い。

「とどめさしたほうが……いいのかな？」

栗色の髪の毛の少女の瞳が断末魔の痙攣をはじめた獣をじっと見つめている。先ほどの戦いの時にはなかった緊張感がほっそりとした身体からしなやかな動きを奪っている。

動物の命を奪ったことのない少年の心が、敵とは言え命を絶つことに動揺してい

第一話 少年、少女になる

た。

「安心しろ。こいつは化け物の分身だ。もともと命なんかない」

「そうなんだ」

ほっとした顔をしながらもみここの瞳は黒い獣を見つめている。

「それより、この異空間がじきになくなる。現実世界にもどるのに、その格好でいいのか？ この兄ちゃんに見られるぞ。」

「異空間？」

「明らかに普通じゃないだろう？ 魔力の弱いものは存在すらできない、魔物や魔法使い同士の戦闘用の空間さ。今のは、その黒いのが作っていたからな」

「そ、そうかつ。すぐに元に戻してくれ。こんな女装姿でケンイチの前になんか……」

「変身解除ってことだな。大丈夫だ、すぐに……どうした、みここと」

ケンイチの髪の毛をくしゃくしゃにしながら、得意げに腕を組むキンケイド。哀れな憲一少年の頭は文字通りの鳥の巣と化していた。その前で、女装少年は文字通りの狼狽ぶりで、視線が落ち着かない。

「な、なあ。これ、夢だよな。こんなこと、あるはずないよな。は、はははっ」

ようやく冷静になった少年が身体の前を見下ろせば、明らかになふくらみが、二つつ。

第一話 少年、少女になる

たっぷりとしたポリウムで、深い谷間がくつきりと柔らかな半球の間にできている。

(な、なんだ、これ。実は毒でも受けていて腫れたりしているのか?)

あの獣を倒すことに集中していて、自分の身体への変化などまったく意識になかったみことの顔にはこわばった笑いが浮かんでいた。

(て、手足もなんか細くなっている気がする)

腕も、細いなりに筋肉がついていたはずなのに、柔らかかそうなすべすべした感じに変わっているし、太腿からふくらはぎについても、鍛えに鍛えた自慢の脚が、むっちり、びっちりとしたものになっている。

(まさか、これって……)

そういえば、髪の毛の感覚だって変わっていき、今更ながら気付く。あれほどの苦痛で、身体が作り替えられていくような感覚は、確かにあった。

(あつという間に男が女になんて、夢に決まっている。そうだよ、な……)

ぽんぽん、と胸元に手をやると、柔らかかいくせにしっかりした弾力が掌に伝わってくる。白い生地は乳首こそ浮き上がらせていないものの、直接肌に触れているようでドキドキしてしまった。

(や、柔らかいし)

第一話 少年、少女になる

心地よい柔らかさと温かさは、あまりに生々しくて、青春真っ盛りの男の子なら、一発で下半身に男の証明が立ち上がってしまうはずだ。

それなのに、下腹部に、腰の奥からわきあがるような、あの熱く固くなる感覚がない。呆然とするみことにサングラスのヒョコが満足げに話しかける。

「はははっ。夢か。このケンイチにとってはそうかもな。だが、みこと……」

ビシッと翼をみことに向け、ケンケイドが胸をはる。

「このケンケイドの魔法は夢じゃあない。現実だぜ」

だいたい、サングラスをして人語をしゃべるヒョコというだけで魔法を信じるに値するわけだが、今みことが聞きたいのは、もちろんそんなことではない。

「魔法少女みこと、初出勤お疲れさんってことだ」

「しよ、少女、だって——？」

その瞬間のみことの顔は、凍っていた。次の瞬間には全身をさぐって、自分の筋肉や、男の証拠を探していた。

「こ、こらっ。それは女の子がしちゃいけないポーズだぞっ」

「ぼくは男だっ。男なんだぞっ」

スカートの上から、必死で自分の男の象徴を探して下腹部を探るみことだったが、徒労であることは明らかだった。そこはつるつるとした、柔らかい感触だけで、い

第一話 少年、少女になる

かに通常時のソーセイジであろうとも、隠れるスペースなどあるはずがなかったのだ。

「もどせつ。すぐに戻せつ。戻してくれよお……」

目に涙が浮かんでくる。どうしてこんなことになってしまったのか。自分が女顔なのは自覚していたし、だからこそ男らしくあろうとしてきたのに。

悔しくて情けなくて、気がついたときはキンケイドを両手で包むようにして懇願していた。

「お、おい。落ち着けよ。変身解除だな。すぐにできるぜ」

みことが手の甲で涙を拭った、ほんの一瞬で変身解除は終了した。目を開けてみれば見慣れた黒い詰め襟の学生服だ。もう少しで泣き出しそうなほどに追いつめられていた少女は、大きいため息を……つくことができなかった。

「お、おい。服装は治ったけど、性別が直ってないぞっ」

そう、みことはあのちよつときわどくも可愛らしいコスチュームからは解放されたが、まだ少女のままだった。

（も、戻れないの？ 男に？）

女装少年改め男装の美少女だ。やはり男よりも腕が細いのか、袖のあたりはゆるいのに、胸のあたりがかなりきつい。

第一話 少年、少女になる

「あれ？ おかしいな。確かに解除したんだが……ああ、なるほど」

「なるほどじゃないよ。なんだっていうんだ」

「チャージされたエネルギーが残っているんだ。時間がたてば直るさ」

「時間がたてばって……おいつ」

色を失った世界が、ゆらめいて見える。これが異空間が現実世界へと戻る前兆だと直感したみことは自転車に向けてダッシュした。

この姿をケンイチに見られたくない。いや、世界の誰にも見られたくない。自分が本当に女になってしまったことを、誰にも知られたくない。その一心だった。

あっけにとられている様子のキンケイドを学生服のポケットに詰め込むと、道路を蹴るようにして勢いをつけ、自転車をこぎ出す。

（ま、まずは逃げるっ！ ケンイチの前になんかいられるかっ！）

世界に夕焼けの色彩がゆらめきながら戻ってくると同時に、異空間ではいなくなっていた人々の姿が徐々にうかびあがってくる。それは文字通り魔法のようで、目を奪われる光景だった。

だが、そんな幻想的な光景も今の少年には感動している余裕はない。お尻や胸のあたりを窮屈に感じながら必死にペダルを漕ぐ。家まではすぐそこだ。誰にも今の姿を見られずに、自分の部屋に逃げ込みたかった。

第一話 少年、少女になる

(近所の人に気づかれぬうちに家に入らないと……)

高度成長期のなごりのような大規模団地。その建物間に自転車をすべりこませるみことの額には、うっすらと汗が浮かんでいる。額に一筋の髪の毛が貼り付くのが魅惑的だ。

各戸ごとに与えられた物置脇のサイクルポートには、下の姉や母の自転車が並んでいる。駐車場にクルマがないところを見ると、上の姉以外は在宅のようだ。

(うっ。お母さんだけならよかったのに……)

自転車のスタンドを立てて鍵を取り出した少年いや少女は……公営団地の階段をかけたのぼり、そっと玄関の扉を開けた。

「あら、お帰りなさい、みこと。今、お水入れるわね」

音をたてないように気をつけたつもりだが、母には気づかれてしまったようだ。

「ただいま。お水はあとでいいから」

キッチンから母親の綾乃の声が聞こえる。意識して低い声で応えたみことは、母親に顔も見せずに階段を登り、自分の部屋に駆け込むようにして扉を閉める。キッチンでは母親が冷たい水の入ったコップを持ったまま首をかしげていた。

「みことったら、不機嫌なんて珍しいわね」

冷たい水を飲んでから自室に向かうのが習慣だった。夕食の支度をする母親に学

第一話 少年、少女になる

校や部活のことを話すのがいつもだったが、今日は一言もないどころか顔も合わせない。

「何かあったのかしら……」

ちよっとだけ心配そうな表情で綾乃は首をかしげて息子の部屋のドアを見やると、夕食の準備の続きをはじめた。

クローゼットの扉の鏡に自分の姿が映る。もともと線が細く女顔のみことだが、今日は学生服の胸の部分が、明らかに持ち上がっている。

腰のあたりが細くなって、お尻が大きくなってるのは、学生服では見慣れた人でなければ気づかないかもしれないが、自分でははっきりとわかってしまう。

何より、ランニング、ワイシャツ、学生服と三重に締め付けられた胸がかなり苦しい。腰まわりは逆にベルトの穴を一つ狭めたほうがいいかもしれないくらいだが。

(なんか、胸が苦しいし。しょ、しょうがないよな。脱ぐのも……)

ボタンを一つずつはずしていくと、はちきれそうな勢いで胸元が広がっていく。しめつけられていた圧力がなくなるだけでちよつとした開放感があり、思わずため息をついてしまった。

学生服を羽織っただけの状態で見ると、見知らぬ少女が戸惑ったようにこちらを見ている。自分と同じ顔のはずなのにドキリとしてしまった。

(み、妙にスタイルがいいんだよな、これ……)

黒い学生服の間から、誇らしげに白いシャツを持ち上げる双丘。ちよつと童顔ぎ

第一話 少年、少女になる

みな美少女と学生服の組み合わせはかなりイケナイ雰囲気漂っている。

もしかなくてもカップ以上ありそうな、ロリ顔巨乳学ラン少女だった。

(まあ、自分自身じゃどんなにスタイルよくても関係ないけどな)

バサリと無造作に脱いだ学生服をハンガーにかける。ベルトを緩めて学生ズボン
を脱いだみことはがっくりとうなだれた。

毎日サッカー部で鍛えてきた運動選手の脚が女の子のすべすべした足に変わって
しまっている。太腿やふくらはぎの筋肉が外からはわからなくなり、ほっそりと優
美な曲線に変わってしまったている。

(ぼくの身体……)

腕だってそうだ。細くて綺麗な指は、それでも自転車で鍛えた握力を支えるため
の筋肉はしっかりあった。手首だって、二の腕だってそうだ。

(筋肉がなくなっちゃってる)

こんなに柔らかくなってしまった。内側の筋肉のしなやかな弾力が、感じられな
い。

(やっぱり、力も弱くなっちゃってる)

以前買ったけれど、ほとんど使うことがないグリップ型のトレーニング機器を握
ってみた。三十キログラムのものだが、必死にならないとバネをたわめることもで

第一話 少年、少女になる

きなそうだ。

シャツにパンツ、靴下というあまり人に見せられない姿のまま、性転換中の少年（現在はオンナ）は自分の身体を確認しては情けない表情を浮かべていた。

「どうしたんだ？ 何か問題でもあるのか、みこと」

ハンガーにかけられたままの学生服のポケットからナゾの生き物が顔を出す。

「おおありだよ。家族にバレたらどうするんだ」

「聞いたかぎりだと、お前の家族ならむしろ喜ぶんじゃないのか？」

「だから嫌なんだっ。ぼくは男だぞっ。これ以上女装なんてっ」

今は女だから普通だろう、という当然なツツコミはこなかった。さすがにヒヨコモ空気を読んでいるのかもしれない。

頭を抱えたみことはしばし迷った末に鏡を見ることにした。正直恐かったが、見ない訳にはいかない。

「これが……ぼくなのか……」

ハイベッドの下のデスクから鏡を取り上げたみことは目を見張った。エチケツトブラシに組み込まれた小さな鏡だったが、十分に用は足りる。

（やば、マジで女になってるっぽい……）

そこに写っている美少女は、みことであってみことでない、そんな自分でも不思議

第一話 少年、少女になる

議な感覚だ。

なんだかドキドキする。自分の顔のはずなのに、誰か知らない人の顔のような気がした。顔の個々のパーツはそっくりなのに、印象は柔らかい。

もともと女顔ではあるけれど、ふだんのみことは気負っている分だけ表情が固いというか、強気な表情を崩さない。

けれど、鏡に写っている女の子は何かふんわりとした優しい感じがする。困ったような表情は確かにみことのもので、ちよつとした違いでこんなに変わるものだと驚くほどだった。

「どうした？ 十分に綺麗だと思うが」

「だから、そういう問題じゃないんだって……」

鏡の角度が変わった瞬間、見てはいけないものが鏡面に写ってしまった、心臓がはねあがる。

（う、うわっ、大きいよな、この、ムネ……）

ランニングシャツの胸元がきつく思えるほどの膨らみは、薄い生地がぴったりと張り付くように形のよさを主張していて、そのてっぺんにぽつちりと小さな突起が浮き上がっているのがはっきりわかる。

「こ、これって……ううっ」

第一話 少年、少女になる

思わず触れてしまったみことの唇から喘ぎにも似たうめきがこぼれる。電流が走ったかのような鋭い刺激が、胸の膨らみの頂点から全身に放たれ、思わず身体をこわばらせてしまった。

（な、なんだよ、これ。ただ触っただけなのにっ）

鏡には、一瞬にして顔を赤くしてしまった美少女が映っている。焦りと羞恥の表情が少年の男の部分を刺激する。もはや記憶の中にしかないはずの男の象徴が頭をもたげ、大きく反応したような気がした。

鏡の中にいる美少女の、サイズの明らかに合わないランニングシャツ姿はあまりに無防備でだ。細く薄い肩といい、脇の下にくぼみから乳房への曲面の連続がシャツに隠れていく様子がいちいち思春期の男の子の脳髄を直撃する。

（ま、まずいよ、これ……ヤバイって）

だいたい、かなりの豊かさを誇るバストはちょっとした動作にも量感たっぷり揺れつぷりを見せ、ブラジャーというものの重要性が今の少年にはよくわかる。

もしなかったら、揺れだけで青少年の多くが犯罪への欲求に駆られてしまうのではないか。それほどに、思春期まったただ中の童貞脳には刺激的だ。

「あ……固く……なってる……くうっ」

ぽつちりとシャツの薄い生地を透かして、色づきが濃くなったような気がする乳

第一話 少年、少女になる

首は、ひどく敏感になっていた。先ほどに比べても電流のような刺激はさらに強くなっていて、びくりと身体が震えてしまった。

「あたりまえだろう。そういうもんだからな」

そうキンケイドが肩をすくめた瞬間、我に返ったみことは顔から火が出そうな羞恥に文字通り真っ赤になった。ヒヨコとはえ、他人の見ている前で何をしていたのか。

「なんだ。恥ずかしいのか？」

ヒヨコの口元が皮肉な感じにゆがんでいるのがひどく腹立たしい。それが自分への怒りの裏返しなのはわかっているけど、抑えきれぬ気がしない。

「恥ずかしいに決まっているだろうっ」

「仕方ないさ。全身が活性化しているんだからな。感覚神経も敏感になってるから、そういうもんだぞ」

「……殴っていいか？」

殴るどころか床にたたきつけてやりたいのを我慢しながら、もふもふのヒヨコを学生服のポケットから取り出す。

どれだけ敏感になっているのか、手の中での羽毛の触感にすら背筋がゾクゾクしてしまった。

第一話 少年、少女になる

「お、おい。何をする……っ、こら、しまうなっ。出せっ」

そのままデスクの引き出しにヒヨコを押し込み、椅子に座ったまま両足の間に手をついたみことは泣き出した気分だった。

「そこでじっとしてろっ。まったたく……」

すぐに食事の時間がくる。そのままリビングでテレビやゲーム、読書などの後、順番に風呂に入る。それがおおよその日課というか、スケジュールだ。どうやって女になっていることを隠し続けるか。

(どうしよう。こんな状態じゃ、家族の前にも出れないぞ)

意識してしまったせいか、この身体の敏感さには驚くほどだ。二の腕、太腿、どこを触ってもビリビリと震えるような快感がある。

こうして座っているだけでも、椅子のファブリックの感触が太腿を刺激してしまおうし、シャツに押しつけられて擦れるせいで、固く突起してしまった乳首がひどく熱い。

「どうするんだよ、これ。女の子の身体、エロすぎだろ……」

下手に服を着ると、それだけで敏感になってしまった身体が反応してしまいそうで、とても怖い。健康な(元)男として、女体の神秘を探求してみたい気持ちがあることは否定できないが、それが自分の身体だと思おうとどうにもやりきれない。

第一話 少年、少女になる

(違うだろ、まずは夕食をどう切り抜けるかだっ)

鷹月家の夕食は遅刻者がいないかぎり家族全員ですることになっている。欠席などしようものなら、心配した家族全員が部屋に押し掛けてくるのは確実だ。どうやって出席するか考えているところに、部屋のドアがノックされた。

「みこと、ご飯だよ。お母さんがそろそろ下りてきなさいって」

下の姉のひとみだ。弟ラブ、みことの女装万歳なところはあるが、少年が嫌がることはしないので、女装を強要されることもない。

「うん、わかった。すぐ行くよ」

強引な上の姉、かんなに比べればつきあいやすいといえる。意識して低めの声を出して返事をする。

「じゃ、先に行ってるよ」

ひとみはさっぱりした女性で、ちよつと男性気質というか、そんなところがある。長姉のかんなは逆に執念深いというかちよつと粘着質な感じで、時には愛情が重い。ひとみの足音が階段を下りていくのを感じながら、みことは懸命に頭を働かせていた。

(どうしよう。どうすればごまかせるかな)

とりあえず、声はなんとかかなりそうだ。問題は、このシャツを下から持ち上げる

第一話 少年、少女になる

二つの隆起だ。もともと細身のみことだけに、立派なバストはかなり目立ってしまった。まずはこれをなんとかしないとイケないわけだが……。

「いただきまーす」

「どうぞ召し上がれ」

結局、食事時には上の姉、かんなも仕事から帰ってきて、一家四人そろっての食事となった。すでに二十歳を越える娘を持つとは思えないほど若作りな母、綾乃。

にっこりと微笑みながら、子供たちが手を合わせるのを見守る様子は理想的な母親といったイメージだ。その綾乃が怪訝そうに首をかしげた。

「……でも、みこと君、その格好……カゼでもひいたの？」

「そうねー。ちよつと顔も赤いし、お姉ちゃん心配かしらあ？」

「そうだな。みことが厚着なんて珍しいぞ。大丈夫なのか？」

母親の質問から、期せずして長女、次女まで続けての疑問符となった。みことの女顔にもまったく負けない、鷹月家自慢の女性たちが一斉にこちらに疑問を向けるのは、ちよつと冷や汗ものだ。

（お母さんは……まあ、いつもどおりかな）

鷹月家の主婦、綾乃。夫亡き後鷹月家を切り盛りする、おっとりとした印象なが

第一話 少年、少女になる

らもやるべきことはしつかりやるお母さん。ときどきだけどパートの仕事もして、家計の足しにしているようだ。

長い髪を束ね、首もとをすっきりさせているのが清楚さを演出させると同時に大人の女性の艶というものを感ぜさせる。

というか、四十歳前後のはずなのに身体のラインの崩れをほとんど感ぜさせないのは、きつと日々の努力のたまものなのだろう。

(かんな姉さんはけっこう疑問な感じ?)

ちよつと語尾を伸ばすのが特徴の長姉かなは、家計を助けるためと称して高校卒業後は中小企業に就職。進路担当の教師が涙を流して進学を懇願したという頭腦の持ち主で、高校時代から様々な資格を取得し、「超人」と呼ばれる逸材であったという。

見た目は、ポリウムたつぷりの髪に知的なメガネのセクシー・アンド・クール。あくまでも外部ではだが。家族の前ではルーズでそのくせ弟ラブ、かつみことの女装に執念を燃やす問題児だ。

昔から弟ラブなのはいいが、泣かすのも大好きないじめっ子でもある。得意技は後ろから圧倒的なバストを押しつけてみことの動きをとめる羽交い締めと、ゾクゾクするような耳元への囁きだ。

第一話 少年、少女になる

(ひとみ姉さんは興味津々、と。困ったなあ……)

ちよつと男っぽい口調の次女、ひとみは勝ち気そうな瞳とショートカットが特徴の明朗青年……じゃなくて、明るくさっぱりした女性だ。

長姉とは対照的に身体能力に優れ、格闘技から陸上競技まで身体を使うことにはおおよそ能力を發揮する。

鷹月家の田舎の親戚の道場で、弟子たちにまじって普通に稽古に参加できるレベルの強さらしい。得意技はプロレス技一般。そのすべては弟とのスキンシップのために覚えたと豪語するツワモノだ。

現在は大学に進学し、アルバイトをしながらさまざまなスポーツ、アウトドア趣味に手を出しているが、やっぱり弟ラブのために、原則日帰りでいける場所にしか行かないダメ姉っぷり。

服装はラフでスポーティなものを好むので、姉のかんなのルーズさとあわせて露出度は高くなりがちで、母親の綾乃に注意されるのも珍しいことではない。

そんな三人の視線は、みことの身につけているパーカーに集中していた。もともと成長期で運動部のみことは体温も高めだし、健康優良児なのであまりカゼも引かないのだ。

「あー、うん。ちよつと帰り道に身体冷やしちゃったみたいだね。念のためだよ」

第一話 少年、少女になる

ちよつと頬が赤いのも演技のリアリティを増してくれたかもしれない。

「そう。無理しちやだめよ。今晚は早く寝なさいね」

「うん。今日は早めに寝るつもりだよ。お風呂は入るけどね」

母親はあっさりと納得してくれたようだ。だが、問題は二人のお姉ちゃんズだ。

「ホントに大丈夫？ お姉ちゃん、添い寝して看病してあげようか」

「ありがとう。でも大丈夫だよ」

かなは弟をかまうチャンス到来と肉食獣のように瞳を輝かせていたが、みことのつれない言葉にがつくりと頭を垂れた。

「そんなあ。お姉ちゃんに看病させてよお」

「もう。ぼくだって子供じゃないんだから」

みことが部活で遅くなるようになって、一番落ち込んだのがこのかなだ。会社では優秀だそうだが家ではかなりポンコツだ。

「早めにお風呂入れよな。はちみつ大根作っておいてやるから」

「ありがとう。ひとみお姉ちゃん。じゃ、ぼくは部屋に戻るね」

「あー、ひとみ、ずるいー。私もみことに何かしたいのに」

階段に向かうみことの背後から姉たちのじゃれ合いが聞こえてくる。どうやら二人で民間療法の飲み物を作ってくれることになったようだ。

第一話 少年、少女になる

普段は夕食後は家族でリビングで過ごすのだが、カゼ気味ということで怪しまれずに部屋に戻れそうだ。

「どうした。疲れているみたいだが」

キンケイドもなんとか引き出しから脱出したようだが、羽根がヨレヨレのあたり、だいぶ苦労したようだ。

「ぼくに演技は向いてないなあ。すぐく気を使うんだもの。それに……」

部屋に戻ったみことはパーカーを脱ぐとハイベッドに上がって腕を枕にする。

(なんだがちょっとしたことでもゾクゾクする。女の子の身体、ヤバイ)

天井を見上げながら、なるべくうかつに動かないようにしないとヘンなところで感じてしまいそうだった。そこにキンケイドが小さな羽根をぱたぱたと動かしながら飛んでくる。明らかに物理法則を無視した、ふわふわした飛び方だ。

「身体全体が活性化しているし、感覚神経も例外じゃないからしかたがないだろう」

「結局おまえのせいだよ。どうしてくれるんだっ。契約はもうナシだっ」

「無理に決まってるだろ、そんな簡単に解除できるか」

それは、実は言う前からわかっていた。契約にはかなりの力を使うし、原則として一度に一人としか契約はできない。契約時に伝わってきた知識の中にもそれはあった。今のキンケイドの力では、次の適格者を探して契約することはもうできない

第一話 少年、少女になる

だろう。

「まあ、チャージされた魔力を使い切れれば戻るさ。心配するな、お嬢ちゃん」

「ひ、人事だと思って気楽に言いやがって。それからお嬢ちゃん言うなっ」

すべてがキンケイドの魔法と契約のせいだということはわかったが、果たして学校に行くまでに男に戻れるのか。いささか不安になるみことだったが、まだ最大の問題が待ち受けている。

そう、異性の身体で風呂に入るという試練というか褒美というか、とにかく童貞少年少女には刺激の強すぎるイベントが残っていた。

第一話 少年、少女になる

4

女体の神秘童貞少女

「はあ……」

脱衣室に鍵をかけると、衣服を脱いでいく。

シャツに乳首が擦れるのも、そのシャツの上からパーカーの生地に触れるのも、二の腕の素肌に裏地が触れるのも、それだけで肌が粟立ち、うぶ毛が逆立ちするような快感は走る。

（うわ、服がすれるだけでゾクゾクくる）

男より女性の方がセックスの快感は強いというが、本当かもしれない。というか、きつとそうだ。男だってオナニーの時とか身体が敏感になるけれど、こんなじゃない。

（なんだか……乳首がビクビクするというか……）

固く立ち上がってしまった乳首には、怖くて触れない。ただ擦れるだけでジンジンと熱く、ヒリヒリと疼くというのに、手指で触れたらまずい。そんな予感があった。

男性器官が股間にあつたら、熱く、固く脈打ったまま一向に戻ろうとしない、そ

第一話 少年、少女になる

んな状態だ。率直に言って、思春期の童貞脳には刺激が強すぎる。

(トイレも、なんかヤバイよ。何をするにもゾクゾクする)

先ほど小用を足したときのことを思い出すと、耳まで熱くなってしまふ。女の子は立ってしない。そして小のときに紙を使う。そんな知識はあるものの戸惑うことばかりだ。

ジーンズ生地ズボンを下ろしただけで何か甘い香りがする。男とは違う、若い女性の体臭だ。

(自分の体臭でヘンな気分になるとかびつくりだよ、もう)

着替えのときにも感じたけれど、男と女は別の生き物ではないかと思うほどに違うにおいだ。乳くさい、なんて表現もあるけど、甘く優しい感じの香りはちよつと納得できる気がした。

パンツを下ろして、便座に腰掛ける。見まいとしても、見なければわからない。

(うっ。恥ずかしいけど、やっぱり見ないとできないよな)

目にはいったのは、下腹部にゆるやかに盛り上がる恥丘と、うっすらとした陰りのような繊細な、薄目の茂み。

(う、薄っ。ほとんど丸見えじゃないかっ)

第一話 少年、少女になる

その下の肉溝と薄皮でできた小さなフードがはつきりとわかるほどに草むらは薄く、少年の意識は思わず吸いつけられてしまった。

トランクスタイプの男物の下着と女性の下半身の組み合わせはなんだかひどく背徳的で、背筋がゾクリとしてしまった。明らかに、何かイケナイことをしている雰囲気でいっぱいだ。

（ううっ、トイレまで女の子なんだよなあ……そりゃ、そうだよなあ……）

下腹部がせつなく、小さな膀胱がちきれそうな感覚がある。女性として用を足すのに抵抗があったために我慢しすぎてしまったせいかな、尿意は急迫して肌が汗ばむほどだ。

シャアアッ！

しっかりと唇を結んだまま、そろそろと下半身から力を抜いていくと、いきなり身体が震えそうになってしまった。予想よりもはるかに早く放尿が始まったのだ。た。

（えっ、なに、これっ。ちよ、ちよっと……）

パンパンになった膀胱の内圧が水流とともに抜けていく開放感と、尿道を駆け抜けていく快感。もちろん、男としての放尿と共通する感覚もあるのだけれど、そこに至るまでの感覚が違う。

第一話 少年、少女になる

(ト、トイレで感じるなんて、これじゃあヘンタイみたいじゃないかっ)

全身が敏感になっていいるせいか、小用を足すだけでも感じてしまうらしい。恥辱に頬が染まり、反射的に排尿を中断しようとするのだが、水流は止まらない。

シャアツ、シャツ、シャアアーツ。

もちろん、強弱こそあるものの、我慢しすぎたオシッコは途切れれない。男と女の、予想外の違いに愕然とする。

(途中で……止められない？ で、できないことはないみたいだけど……)

これでは、トイレにいくのを我慢するのって、かなり大変じゃないのか。女生徒がトイレに連れだつていくのもわかる気がする。

(う、うん。思いつきり締めて止まる感じ？)

これじゃあ、いざというときに我慢しようにも我慢できないかもしれない。早めにトイレに行かないと漏れてしまいそうだ。

(し、失禁だけは勘弁だぞ。ううっ、まだ止まらない……)

男の子と女の子の身体の作りは違う。理解しているつもりだったが想像以上に早く排尿が始まってしまったのは尿道の長さ、それをしめつける筋肉の量が違うからだ。

白く滑らかな内腿がビクビクと震え、うっすらと筋肉が浮かび上がるのが妙にエ

第一話 少年、少女になる

ロティックで、思わず目をそらしてしまった。

おしっこが出終わったときには全身の肌がうっすらと汗ばみ、乳首が固くなって、なんだか痛いようなむずがゆさを感じるくらいだ。腰の奥のあたりが熱くなって、なんだかもやもやするのが、恥ずかしくて嫌だった。

そんなトイレでのことを思い出すだけでも恥ずかしいのだが、ランニングシャツの布地にくつきりと浮き上がっている突起は紛れもなく勃起してしまった乳首だ。

男の子との時の、小さな目立たないものとは明らかに違っている。

(ええと、二回りくらい大きいのか、乳首は……)

ランニングシャツに窮屈におしこめられた乳房が作る曲面とシャツに浮かび上がるシワが隠された双丘のポリウムを物語っていた。

(ムネ自体も本当はかなり大きいよな……って、何考えてるんだ、ぼくはっ)

下着姿になったみことは、そのまま思い切ってランニングシャツをまくりあげるようにして脱いでいく。

ふるんっ——。

シャツの布地からこぼれ落ちた柔らかかな丸みが、瞬間的に大きく揺れる。男の感覚しかなかった少年の脳に違和感と羞恥がわき上がる。

第一話 少年、少女になる

(おっぱいが揺れるって、こんな感じなんだ……って、だからっ)

自分でも何を考えているのかわからなくなってくる。だいたい、みことだって健康な十代男子。一番性欲の強い時期なのだ。

(スケベ心出しているばあいじゃないだろうっ)

当然、いわゆる自慰行為の経験だってある。自分の身体だからと意識をそらした一方、女体への興味ももちろんある。そんな童貞男子(の心を持ったオンナノコ)の前に、ナマのおっぱいがあるわけで、思わず見入ってしまったとしても不思議はないだろう。

(形は、綺麗な方だよな、多分……)

形は、お椀型。豊かだけれども形の崩れるほどの大きさではない。両側の乳房を寄せる衣服がなければびっちりした谷間は普段はできないようだ。

それでも手で触れてみれば、それぞれの手には明らかに余るボリュームに圧倒される。

(柔らかいし、ふっくらして……ううっ)

指で敏感になっている乳首を挟む形になってしまい、声が出そうになってしまった。乳房自体の肌も感じるけれど、乳首の敏感さはまるで違う。特に勃起してから乳首は触れれば電流のような快感が神経を流れる。

第一話 少年、少女になる

(どうすんだよ、これ)

手のひらに感じる量感ある曲面の柔らかさ。男の身体にはない、脂肪たっぷりのくせにはち切れそうな弾力すら感じさせる膨らみが息づいている。呼吸のたびに上下する感触だでも手の中に心地よさを感じさせる。

(と、とにかくお風呂に入ろう。それから考えるんだ)

たっぷりとしたポリウムを楽しむだけで時間がたってしまいそうだが、いつまでも脱衣室においては本当にカゼをひいてしまう。

(え、なに、これー)

靴下とトランクスのパンツを脱いだみことは、またここで困惑することになってしまった。とろりと、糸を引いて光るものがある。それが自分の股間からだど気づいたみことは全身から火を吹きそうな羞恥を覚えた。

(ぬ、ぬぬぬ、濡れてるのかっ、これっつ。うわ、こんなになるんだ……)

たったこれだけのことで、身体は感じてしまっていることを思い知らされる。ただでさえ薄い繊毛が水分を含んで恥丘にはりついているのがいやらしい。肉豆を保護するフードがくつきりと浮き上がり、脱衣室の照明の下で太腿と下腹部の作るの字の形が強調されていた。

(ど、どうしよう)

第一話 少年、少女になる

どのみちお風呂に入るしかないのだが、混乱している少年少女はティッシュを手にとって、羞恥の液体を拭き取ろうとしてさらなる墓穴を掘ってしまう。

「ひゃふうっ」

はつきりと声が出ってしまった。本当に電流が走ったかのように身体が痙攣し、膝がガクガクとして、力が抜けてしまいそうになる。

(で、電氣い、走った……)

秘裂周辺ににじみ出ているぬめ光る液体を拭きとろうとして、敏感な粘膜に触れてしまったのだ。

(ヤ、ヤバイだろ、これ。女の子の身体ってこんななのか)

ただでさえ微妙な部分であり、感じやすい部分はティッシュペーパーの、ただ触れるだけの刺激にすらも激しい快感信号を発生させる。

(くうっ。ちよっ、これ……ダメだろっ)

垂れ落ちそうな蜜をぬぐう動作は連続的な快樂刺激で少年少女の神経を連打する。

(な、なんだ、これ……力、抜けちゃった)

かろうじて続けている声は押さええられただけで全身の肌が快感のベールに覆われてしまったかのようにざわめく。ジェットバスの泡の一つ一つが肌にあたる感覚全てが性

第一話 少年、少女になる

的悦楽となり、しかもそれが全身を覆っている感じだ。

(それより、お、お風呂……入らなきゃ)

鏡には、ぼおとした表情でうつすらと肌を上気させた童顔の美少女が無防備な姿勢を見せている。

快感をこらえるために脚をひきしめ、内股になっているところが妙に色っぽく、みことの心の中の男性器が大きく反応してしまった。

(ぼ、ぼくのバカっ。これじゃ本当にヘンタイじゃないかっ)

浴室の扉を開く感覚もなんだかふわふわして、自分の身体じゃないみたいだ。けだるいような、不思議な身体の重さを感じながら分割されている風呂の蓋を持ち上げた瞬間、浴槽に充滿していた湯気もわっと広がった。

暖かい蒸気が周囲にたちこめる。ただそれだけの、あたりまえの感覚が今の女性化少年にとっては強烈な刺激だった。

ぞわり——。

かすかな空気の動き。湯気を含んだ湿気と熱が全身のうぶ毛を揺らし、普段ならどうということもない刺激が肌を柔らかな筆でくすぐられているような快感を生み出してしまふ。

「ひっ……んん、んんっ」

第一話 少年、少女になる

反射的に出てしまふ声をなんとか押し殺し、手桶にお湯をくんで手足にかけるのだが、そのお湯の心地よさにすらも背筋がゾクゾクする。お湯の心地よさが波のように全身に伝わると同時に、性的快感にもつながってしまう。

（まずいだろ、これ。女の子の身体、マジでやばいって、これ……）

もう、見なくてもあの部分が濡れていることがわかる。男だって、濡れる。みことの仮性包茎のソーセイジだって、快感が高まってくれば粘液を鈴口からにじませ、潤滑剤にするようにできている。

（なんかすっごい濡れてるし）

でも、秘裂からにじみ出る蜜液は「濡れる」という言葉が納得できるほど大量に分泌され、その部分を潤していた。

（なんか、身体の奥のほうから熱くなっちゃってる……）

腰の奥のあたりが熱く、なんだか脈動している。それか子宮なのか卵巣なのか、それとも別のものなのかはみことにはわからないけれど、女性器官なのは間違いないだろう。同じ自分の身体のはずなのに、勝手が違いすぎる。

（くっ……こんなエロ感覚に負けるもんかっ——うっ、うぐっ）

泡を含ませたスポンジで手足を洗うのは、もうセルフ拷問というか、ほとんどオナニーというか、全身がビリビリと快感信号に震え、過敏になった神経を刺激しま

第一話 少年、少女になる

くるひどい行為だということがよくわかった。

「ひゃふっ……ど、どうしよう、これ。ぜんぜん進まないぞ」

背中に手のひらとか、足の指の間とか自分でも思っていなかった部分が危険なほどの肉悦シグナルを発し、ジンジンと脈動する快感の波が全身に広がっていく。

(ど、どうしよう。すぐくまずい気がする。でも……)

身体を洗わないと、まずい。ただでさえ運動部のみことだ。しかも、代謝の激しい十代男子。身体を洗わなければ、あつという間にヤバイ臭いになることはよく知っている。でも、今のこの身体を洗うのは、いろいろ問題がありそうだった。

はあつ、はあつ、はあつ——。

しばし時間をかけて、手足を洗う。背中に手を回し、スポンジで肩胛骨の間をこすった時や、腰からお尻を洗ったときはヤバかった。

「はあつ、はあつ、はあつ——」

ビクビクするような刺激に手が止まってしまい、おそろおそろ洗わなくてはならなかった。気づいたら息が荒くなっていた。

(お、女の子の身体って……やっぱり神秘というか……)

女体の神秘などという魅惑の言葉に反応してしまう十代童貞男子のココロがリアルの情報にオーバーフローを起こしている。現実の快感情報と視覚情報が頭の中に

第一話 少年、少女になる

いっぱいになってしまい、くらくらししていた。

(乳首が、ボッキしてるんだよな、これ……ビリビリする……)

柔肌をスポンジで磨いていく。全身の肌がすべすべして、女の子のふつくらとした脂肪層とで撫でるだけでも気持ちいい。こすられて細かい泡をまぶされていく皮膚は背筋がゾクゾクするような快感を発生させ続けている。

でも、そんな快感だってまだマイルドなほうだった。双丘の頂点に位置する突起はそれとは段違いの、文字通り痺れるような感覚。パルスを、快楽中枢に送りこんでくる。

(おっぱい柔らかいし、すべすべしてるし、なんか全身がゾクゾクビクビクするっ) 全身が快感のベールに包まれてしまったようで、ちよつとした動作で手おけやタオルかけなどに触れるたびに快感の波紋が全身に広がっていく。

洗い場の鏡には初めての感覚に戸惑いながら全身を洗おうとする美少女の姿が映し出されていて、童貞脳を強烈に刺激している。

(うわ……こんな顔、してるんだ。エッチな顔、してる……)

鏡の中にいるのは、ショートカットの髪が艶々して健康そうな、ちよつとボーイッシュな印象の少女だ。けれど、その身体はボーイッシュとはほど遠い、丸みと柔らかさを帯びた曲線とすべすべした肌で構成されている。

第一話 少年、少女になる

とろんとした目。大きな瞳が潤み、赤く染まった目元とあいまってかなり色っぽい。自分だとわかっていても、なんだかドキリとしてしまう。

胸元の膨らみも鏡の中ではより客観的にボリュームが理解できるし、そこかしこをスポンジでこするたびにビクビクと身体が震える様子がやたらとエッチだった。

(女の入って、みんなこんな耐えてお風呂入ってるのかな)

ナマの女性の身体というのは、思春期の少年にとっては近いものではない。いかに姉たちが弟ラブだといっても、さすがに裸の状態で抱きついてきたりはしない。

姉たちに背中に胸を押しつけられてドキドキしてしまった、あの魅惑の隆起が鏡の中で息づいているというのは、ひどく刺激的な光景だった。

これが自分の身体でなければ、男性器に手を伸ばしてオナニー行為にふけつたとしても不思議はなかった。

(ぼくは男だからな。その、ちよつとくらいエッチな気分になんてなるさ、うん)

女の子がエッチな気分になるという意識がないあたりも童貞丸出しなのだが、ただ身体を洗うだけなのに、すっかり消耗してしまっているのを感じる。

お尻だって太腿だってヤバかったのに、まだ身体の前が残ってしまった。正面の鏡には、とろんとしてしまった女の子の顔がある。

(エ、エロい……これは、エロい)

第一話 少年、少女になる

自分の知らない女の子の顔だ。全身がピンク色に染まり、潤んだ瞳がエロい。ちよつと受け口な唇がかすかに開いて、せつなそうに肩で呼吸しているのもエロい。

「なんで、こんなにエロいんだよお……」

そうつぶやきながら、鏡の中の自分を叱咤する。こんな快感に負けちゃいけない。まだ身体だって、髪の毛だって十分に洗っていないのだ。

でも、鏡の中で、視線を下げれば呼吸とともに上下する、十代としては十分すぎるほどに大きな二つの肉丘の存在感が危険だった。

「ぼくだって男だ。こんなエッチな気分になんか負けるもんかっ」

にゆるん、と手の中でスポンジが泡を生み出す感覚すらも身震いするほどに気持ちいい。それだけで固く突起した胸の頂点が疼いてしまう。

色素の沈着の薄い、明るいベージュ色の乳首がぷっくりと立ち上がり、固くなっている。ちよつと触れただけで乳房の表面を快感信号が駆け抜け、身体が硬直してしまいそうなほどだ。

「敵が手強くても、負けられないんだ。いくぞ……ごくりっ」

スポンジを下から乳房の曲面にあわせるようにしてこすりあげると、それだけで太腿をすりあわせたくくなるようなもどかしさと、くすぐったさと、そして逃げ出したくなるような羞恥と快感が襲ってくる。

第一話 少年、少女になる

「ううっ。ま、負けるな、ぼくっ」

乳房の丸みは乳腺と脂肪によるものだそうだが、それは実は全て快樂神経ではないかと思うほどだ。スポンジは滑らせる手が震えてしまう。

「くふっ、んっ、んんっ」

ふくらみの頂点の突起に触れた瞬間、予期していたにもかかわらず声が漏れてしまう。最初より明らかに色づきが濃くなり、固くなった乳首は、その周囲の乳輪までもが固く、敏感になっている。

（うわ、まだボツキするんだ）

乳輪の凹凸や乳首のベージュ色が白い泡にまみれているのが間近で見られることに、少年としての意識がさらに興奮してしまう。マンガなら鼻血描写は間違いないところだ。

スポンジと乳房の柔らかさがあいまって、手に、胸の肌を感じる心地よさもかなり危険だ。はっきりいって気持ちよすぎて癖になってしまいそうなレベルだ。いくら普通より敏感になっているといっても、女性の身体の感じやすさはすごいと思う。

（まだ、脇腹とか……）

首筋、鎖骨のくぼみ、そしてわき腹からひきしまったお腹のあたり。このあたりもゾクゾクするような快感はあるけれど、耐えきることができた。だいぶ呼吸が荒

第一話 少年、少女になる

くなくてしまい、心臓がバクバクと早鐘を打っているけれど。

(や、やっぱり乳首はヤバイな……この先にまだ問題があるんだけど)

なんとか乳房やわき腹を洗った女性化少年の視線の先には、下腹部がある。もつとも汗をかき、蒸れやすい部分でもあるため、身体を洗う上で避けては通れない部分だ。

(ど、どうしよう……)

股間部には男女両性で敏感な性器があるわけで、先ほどこちよつと拭っただけで膝の力が抜けるほどの快感を味わったみこととしては、もはや恐怖を感じるレベルだ。

(当たり前前だけど、洗わないとダメだよな)

ふつくらとした下腹部の、一番下の部分。股間に近い部分が盛り上がる部分を恥丘という。難しい言葉なら陰阜、下世話な言葉なら土手といったりする。

そこを飾り、恥溝をふちどるようにして茂る草むらは恥毛、陰毛。十代男性のスケベ心で思わず検索してしまった魅惑ワードの数々が頭の中で踊っていた。

細い繊毛は濡れて素肌にはりついて、かえっていやらしい。もともと薄い上に細いので、なんだか影がさしているようにも見える。割れ目の上のほうにある細い部分が、陰核包皮。もつとも敏感なクリトリスを保護している部分だ。

(つて、いかんいかん。今は身体を洗うのが先だつ。エロ心はいらないんだつ)

第一話 少年、少女になる

どうせ、エロ心があつたつて、今の自分じゃできないし、と心のどこかで考えてしまうあたり、みことも男の子。今の自分にペニスがあつたら屹立する肉棒をしごき、欲望を放出することを抑えられなかっただろう。

ふつくらとしている部分が大陰唇。そこから覗いているビラビラが小陰唇。肉溝に消えていく突起物は、クリトリスを保護する陰核包皮だ。

(こ、こんなになってるんだ……すごい……)

いつの間にか、呼吸が荒くなっているのもエッチだった。陰阜から大陰唇にかけてを中指と人差し指で押さえ、軽く開くようにすると肉色の花卉がその形を変え、内部にたつぷりとつまつた蜜があふれてくる。

(うわ、中身が見えちゃう……肉色とか、サーモンピンクっていうのか)

みことの脳内ペニスは痛いほどに勃起している感じだ。なにせ、初めて直接見る女体の神秘だ。その眺めだけで普段の童貞少年なら射精してしまつたかもしれない。

(おしつこの穴は……自分じゃわからないか……つて、違うだろうっ。ぼくっ)

思わずスケベ心が優先してしまつたみことだったが、いつまでも風呂場を占領しているわけにもいかない。ぐずぐずしていると、姉たちが一緒に入ろうとか言つて、脱衣室の扉を叩きかねないのだ。

(ええと、中は怖いからおいておいて、泡をまぶして、そつと……きやふうっ)

第一話 少年、少女になる

スポンジの柔らかさと泡の滑らかさは、もう凶器だった。敏感な股間部分の薄い皮膚に、そして花卉に触れるだけで全身に緊張が走り、膝がガクガクと揺れる。思わずスポンジを強く握りしめてしまい、太腿に泡が落ちるのがまた快感を呼び起す。

(だ、だめだだめだつ。もっと、そつと、慎重に……くつ、くあああつ)

肉溝周辺をなぞるだけで、身体を包む快感の霧がぐつと濃くなったような気がする。じつとりと内部が濡れ、ヒクヒクと局部が収縮するのがわかる。

じゅわっ——。

今、さらに濡れて蜜があふれた。それが自覚できてしまうことがたまらなく恥ずかしく、男とは違う感覚に脳と意識が揺さぶられる。

(な、なんだよ、これ。気持ちよすぎる、だろ。)

くたりと力が抜けてしまい、浴室の壁面パネルにもたれる形になってしまった。ユニットバスなのでタイルの冷たさはないが、ひんやりとした感覚が気持ちいい。そのまま、すっかり荒くなってしまった呼吸に初めて気づく。

はあつ、はあつ、はあつ——。

まるでオナニーをしている最中、気分が盛り上がっている時のようだ。本人はこれでも必死の覚悟で身体を洗っているつもりなのだが、どうみても女の子の自慰行

第一話 少年、少女になる

為そのものになりつつあった。

(くそっ。身体洗っているだけで、だらしな過ぎ、ぼくっ)

スポンジは気持ちよすぎるのでやめて、手で直接洗う決心をした少年少女だが、これもまた落とし穴だった。そう。手で直接自分の身体を触ると、触られた肌だけでなく、手の方も気持ちいいのだ。

(と、とにかく。これはその、身体を洗っているだけなんだからなっ)

誰にともなく、そんなことをつぶやきながら、そろそろとむっちりとした太腿の間に手を伸ばしていく。そのときにも乳房の重みと、やわらかな揺れ具合が意識されてしまう。

(柔らかすぎるだろっ。これ、どうすんだよっ)

背中を壁に預けたまま、もう一方の手を胸に触れさせてしまうと、もう止まらなかつた。むにゅっ、むにゅむにゅっ――。

柔らかいくせに内圧が高いので弾力も十分。指をくいこませると、その間からはみ出す柔肉の見た目が雄の欲望メーターを急上昇させる。

びくんっ！

そして、先ほどの鋭いほどの快楽を発生させた乳首も指の間で転がすように挟むと、泡と石鹼液でコーティングされた肌がびりびりと全身の肌に震えが走るような

第一話 少年、少女になる

快感だ。

「んくっ、んっ、んんっ——」

唇をしつかりと閉じ、歯を食いしぼるようにし声をこらえる。でも、自分の息づかいすらも、かすかにこぼれるうめきすらも男の欲望にとってはアクセルにしかない。

（な、なんか頭がポーツとしてきた）

快感に熱せられた脳は思考力を失い、ブレーキのなくなった欲望がついに女性の身体で一番敏感かつ重要な部位に手を伸ばしていく。

「くふっ……や、やっぱり感じすぎるっ——」

割れ目から顔をのぞかせている花卉に泡をまぶし、指で軽くなでるようにして洗う。ただそれだけなのに、気持ちいい。いや、気持ちよすぎる。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ——」

椅子に座ったまま、白く丸い膝がガクガクと震えたまま、かかどが持ち上がってつま先立ちみたいになっている。

肩と背中を壁面パネルに押しつけてバランスを保っているけれど、あまり激しい快感だと椅子から滑り落ちてしまいそうだ。

（びらびらに触ったら、またあふれてきちゃった。どうすればいいんだよっ）

第一話 少年、少女になる

ここに至っても、本人はまだ身体を洗っているつもりだ。女の子としての快感を追求しているという意識は特にならない。自分の胸に手が伸びているのもほとんど無意識だけれど、それだけに快感の大きさに混乱しているのも確かだった。

(き、きれいにならないよおっ、う、ううっ)

洗えば洗うほどに、身体の奥底から濡れて、あふれてきてしまう。肉溝からかき出すようにすれば、さらに奥からにじむ恥蜜がみるみるうちにいっぱい湧き出してくる。

これではきりが無い。しかたなしに、そこは後回しとしてほかの部分の洗ってやることにする。

(そ、そうだな。とにかくまずは全身を洗って、あふうっ、おかないとっ)

恥毛のあたりにも泡を含ませ、軽くなでるだけのつもりだったのが、運の尽きだった。そこには、女性のもっとも敏感な快楽器官が隠されているのだ。無意識にクリトリス包皮の上から触ってしまったみことの口から、抑えきれないうめきがこぼれてしまった。

「んっ、んくっ、んん——っ！」

全身が飛び跳ねるように身体が反応し。まさに股間から頭頂部までを貫くような快感。ビクビクと全身の筋肉が自分の意志と関係なく反応し、震えわななく。も

第一話 少年、少女になる

う少しで壁に後頭部がぶつかりそうなほどに振り返った喉。

はあっ、はあっ、はあ——。

うつすらと開いた目から、鏡の中で初めての女性としての快感絶頂にあえぐ少女の姿が脳裏に刻み込まれる。湯気の中、うつすらとピンクに染まった肌。下腹部のあたりから、とろりと熱い液体が太腿へと垂れていく感覚に背筋がゾクリと震える。

鏡にはしどけない姿をさらしている美少女は潤んだ瞳でこちらを見ている。口が半開きになって、肩で息をしているのがなんだかひどくエロい眺めだった。

（なんだ、これ。この女の子は。ぼくは、男なのに——）

心臓が全身に血流を送り出すたびに、血管の内側からの内圧が快感神経を刺激し、絶頂快樂は血流に溶けて全身を巡っていくスパイラルができているようだ。

男の絶頂の射精のように瞬間的というか、数秒で過ぎ去る快感とは違い、身体の奥のほうがきゆうつと収縮する感覚とともに、全身がびりびりと痺れるような肉悦の波が襲い、快感信号のパルスの持続時間も長いのだ。

（今の一瞬、頭の中が真っ白に……はううっ）

今どういう状況なのか確かめようと股間に手をやろうとして、もう一度触れてしまった。今度は覚悟の上だったので意識が飛ぶようなことはなかったが、意識して

第一話 少年、少女になる

いなければ身体がガクガクと震えてしまいそうな激しい快感が、ちっぽけな肉粒から発せられている。

(こ、これって、クリトリスだよな……中に、隠れて、洗わないと……)

震える指が薄い肉鞘をめくりあげるだけで小さな肉粒がジンジンと疼き、最初の絶頂でなおさら感度を増しているのがわかる。ネットで仕入れたエロ知識によれば、ここも綺麗に洗わなくてはいけないはずだった。みことだって、包茎ではあるけれど敏感な部分周辺をしっかりと洗っているのだから。

(そ、そおっと洗えば大丈夫だよな……)

その間も、無意識のうちに左手は乳房をもみしだき、コリコリとした乳首を指の間で転がしている。ヒリヒリする感覚が乳首を包んでいて、ぷっくりと勃起して張りつめた表皮が痛いような感覚すらあって、その痛みがなおさら快感を強調してしまふ。

トクン、トクン、トクン――。

(も、もしこの状態で触って、すごかったら)

それはもう期待でしかない。意識しないまま発情状態になってしまった女体はさらなる悦楽への期待に震えている。

ハア、ハア、ハア――。

第一話 少年、少女になる

切ない吐息にピンク色の唇が半開きになっているのも、ジクジクと熟し切った無花果のように内側に蜜を貯めてしまった肉壺がヒクヒクと収縮するのも、もともと敏感なその器官への期待そのものだ。

(今まで以上にすごかったら、どうなっちゃうんだろう)

ゴクリ、と喉が鳴った。知らないうちに潤んで涙を貯めていた瞳はもう焦点を結んでいない。長い脛がまばたきに震え、無意識のうちに唇を舐める舌がチロチロと動く様子が官能的なことに、少年少女は気づいていない。

はあっ、はあっ、はっ、はっ――。

(ちよ、直接触ったら、きつと、もつと……)

そこから先は考えることができなかった。フードごしにすら、一瞬意識が飛びそくなほどの快感だった。そんな、敏感すぎるほどに感じやすいクリトリスが、包皮から顔を出している。

(こ、これは身体を綺麗にしてるだけだから……)

全身が熱く、心臓が拍動するごとに鋭敏な快感神経が疼き、むき出しになった肉突起をさらに勃起させていく。

快楽の霧に包まれたままの足先は、かわいらしい指先がもどかしげに屈伸を繰り返している。全身をめぐる血流の脈動とともに快楽器官が疼く。

第一話 少年、少女になる

無意識のうちに柔肉をもみしだく指が乳房の肌にくいこみ、みっちりつまつた感覚が手を楽しませ、乳腺を、固く突起した乳首をマッサージされる悦楽が脳をとろかしている。

トクン、トクン、トクン——！

すでに自分自身の蜜にまみれた指先を、そろそろと近づけていく。先ほどむき出しにしたクリトリスは膨張率が高いのか、包皮を押しつけるようにして顔を出している。

まるで肉色の宝石のような艶と輝きを持つ、小さな突起は泡と粘液にすでにまみれている。ヒクヒクと震えているように見えるのは、秘部の収縮によるものかもしれない。

女性化少年の指先がむき出しになった肉真珠に触れた瞬間、秘部全体が熱く熱せられ、快樂にとろかされていた意識が衝撃に吹き飛ばされ、真っ白になる。

「——————っ！」

ビクン、ヒクヒク——ッ！

声も出ないほどに身体が緊張し、痙攣にもたわななきが全身を覆う。短髪で隠すもののない首筋が苦悶するかのようになり、壁に髪の毛をこすりつけながら、反り返った身体から突き出される乳房が大きく揺れる。

第一話 少年、少女になる

いや、手で支えられて揺れない方の乳房もまた快楽に燃え上がり、普段なら痛いほどにきつく揉みこまれていた。

ヒクッ、ヒクヒク——！

激しく収縮する秘肉が泡にまみれながら透明な蜜を吐き出し、内ももの泡の間にヌラヌラと光るすじを作っていく。

身体の奥で何かがきゆうっと収縮し、それと一緒に女の子の器官がきゅつとすぼまり、内部に溢れていた蜜が瞬間的に噴出する。その熱い体液がこぼれる感触が恥ずかしくも気持ちよく、ブルツと身体を震わせてしまう。

（な、何これっ。イツ、イツちゃってる？ そんな。ぼく、男なのにつ）

これが性的絶頂。女の子のイキ。気持ちよすぎてイツちゃうつてこと。

（こんなの、クセになっちゃうつ。絶対クセになっちゃうよおつ）

全身の肌が、粘膜が熱く燃え上がり、内側からも外側からも波状攻撃のように何度も快感の波が押し寄せてくる。

「んっ、んんくっ、んんっ」

なぜ唇をかむほどに声を抑えているのかも、もう覚えていない。指がとまらず、ひたすらに敏感すぎる肉真珠をなで回し、ひと撫でごとに発生する肉悦のバルスが快楽曲線を極大値に押し上げ続けていた。

第一話 少年、少女になる

「う、うん……」

意識があつたのは、そこまでだった。意識が戻ったとき、浴室のもうもうたる湯煙になじみのある、独特の臭気が鼻をくすぐる。

「な、なんだ、これ……うわあっ」

泡にまみれた身体。そして、鬼の角か何かのように固く、熱く屹立する肉棒。そして、浴室の側面タイルにべったりと付着した白濁色の粘液。なにがあつたかは言うまでもない。男性が性的絶頂に達したときに起こる現象、射精があつたのだ。

「ということは……よかった。男に戻ってる」

当たり前だが、射精は男にしかできない。思わず手でまさぐった胸にはあのたっぷりとした片手にあまる魅惑的な膨らみはなく、滑らかな少年の薄い胸板がある。股間にはあの柔らかくすぎるほどに柔らかい複雑な造形の女性器はなく、慣れ親しんだ陰茎と睾丸、つまりキンタマとチンチンがついている。

「で、でも……まずいよ、これ、むちゃくちゃまずいっ」

今日は体調が悪いということで、みことが一番風呂だ。つまり、母や二人の姉がこれからこの、青臭いスペルマ臭で充満するバスルームに入るのだ。安堵の次の瞬間には青くなつたみことは、あわてて換気と風呂掃除をしなくてはならなかった。

第一話 少年、少女になる

第一話 少年、少女になる

時は少々さかのぼり、夕刻から夜に移り変わるころ。男に戻れず、混乱したままのみのことが家にたどりつき、自室に駆け込んだ頃にあたる。空には星が浮かび始めていた。

シンプルな洋室。カーテンの開いた窓は、夕刻の空を映し出している。比較的階層の高いマンションだろうか。窓に向けて小さなラウンドテーブルが置かれ、一人掛けのソファに一人の女性がくつろいでいる。その足下にはあの獣の姿があった。

黒い、艶やかな毛皮が光を反射し、一本ずつの体毛が光を反射してキラキラと輝いている。ゆったりと眠るように動かないその獣は、椅子に座ってくつろぐ主人の足下にあつたが、ピクリと長いヒゲが震えた。

「どうかしたのか、ゾディアック」

女主人から声がかけられる。同時に、優美なふくらはぎが毛皮にすりつけられる。嬉しそうに瞼を閉じた獣は申し訳なさそうに、ゆっくりと口を開いた。

「はい。わが主、分身の一体が反応を絶ちました」

赤いエナメル光沢のハイヒールが軽く、からかうように獣の肩のあたりをつついた。同時に深いドレープのスカートの生地が紗のきらめきを放つ。なかなか高級

第一話 少年、少女になる

そんな身なりをしているようだ。

「ほう、あのヒヨコにまだそれだけの力が残っていたか」

「いえ。伝わってきた情報は少ないですが、おそらく魔法少女かと」

獣の口元には凶悪な牙が覗いていた。本気を出せば驚くべき戦闘力を発揮するだろう。身動きひとつで、全身のしなやかな筋肉の膨大さが見てとれる。

「魔法少女システムか。この辺境の世界にまだ生き残っていたのだな」

「はい。この世界も一応は魔法少女クラスタに属しておりますから」

そうだな、と頷く女性は一人掛けのソファから立ち上がると、ベランダの向こうに広がり始めた夜景を見下ろす。バッグを持ってそのままどこかのパーティーに出かけられそうなワンピースに負けない見事なプロポーションだ。

「この世界も楽しませてくれそうだな、ゾディアックよ」

「はい、ガーベラ様。我が主の御心のままに」

長身に赤毛、そして鳶色のひとみの美女の長身に黒い獣がよりそった。窓からの光がその影を壁に映し出している。その影のシルエットは、明らかに人型が二つ並んでいたのだった。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

第二話

油断大敵、
スライムの挑戦！

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

1 第二の怪物

「……そんなわけで、世界には正義の味方と、俺みたいな守護獣がいるってわけさ」

金色のヒヨコ、キンケイドはサングラスを小さな翼で直しながら得意げに語った。

このナゾの生き物によれば、世界というものは意志を持っていて、世界の危機に対しては人間たちの内から危機に対応するための人材を選び、力を与えるのだという。

よくわからないうちに契約を交わしてしまった少年、みことは金色のヒヨコ、キンケイドに事情の説明を求めている。

「それはわかったけど、なんでぼくなんだよ」

「俺は他の世界からやってきたばかりだからな。はっきりいって、偶然だ」

偶然だと言われた瞬間の少年は、眉を八の字にしそうなほどに情けない顔をし、ついで烈火のごとく怒りだした。

「おいっ。偶然ってなんだよっ。ぼくはすごく焦ったし、困ったんだぞっ」

つい昨日には女装させられたばかりか、性別まで変えられてしまった少年、鷹月みことが憤激した口調で抗議する。ちよっと童顔ぎみの女顔なので、むしろ怒った

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

顔もいい、などという女性も多そうだった。

「偶然が嫌なら、運命って奴だな。魔力を含めて、みこと以上の人材はまずいない」
「そ、そうなのか。そういえば、適性があるって」

まだまだ中二心の残るみこと少年は自尊心をくすぐられる。

（運命って……そんなものもあるのか）

いつも女装が似合うだけの男と言われ続けた少年としては、人より優れたところがある、と言われるのはすばらしくまれな、言ってみればレアな体験だ。

「ああ、適性値や魔力がほとんど最大値に近い。すごい才能だぜ、これは」

「そんなにすごいのか？ ぼく、魔法とかまったく知らないけど」

「才能は、この世界でもトップレベルだろうな。十指のうちには入るはずだ」

世界のトップテン。隠された才能。少年のコンプレックスを一気に解消してくれる。そんな言葉の数々に心のどこかが反応してしまうう。

「ただし、女の時の話だけだな」

「うぐつ……」

言外に、男のときのみことはダメダメだと言われているに等しい。どんなによくとっても、平々凡々、といったところだろう。

（女のときだけって……なんでだよお）

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

ふだんの自分を自覚しているだけに、実に大きな槍が少年のセンチティブハートに突き刺さった。

「なんで男の時はだめなんだよ。男の時のほうが大事だぞ」

「そんなこと、俺が知るか。とにかく、男の時は魔力が制限されてるってことさ」

「そんなあ……」

性転換すればその制限が解除される、ということらしい。

（なんで女じゃないとダメなんだよお）

女装の上に性転換までしないと成れないなら、世界のトップテンとやらにならないくてもいい。正直そんな風に思うのだが、一度結ばれた契約は、そう簡単には解除できない。

「まあ、この世界にもともの守護獣だっているはずだ。正義の味方もな」

キンケイドによれば、世界によって正義の味方は仮面の騎士とか巨大ヒロインとかいろいろいるらしい。この世界では残念ながら魔法少女がデフォルトで、変更はきかないようだ。

「この世界では魔法少女じゃなくて、変身ヒーローだったらよかつたのになあ」

「このあたりの世界じゃ、魔法少女が一般的なんだよ。あきらめろ」

いくつもの世界が、時には分岐したりしながら存在する。パラレルワールドとい

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

うやつだ。キンケイドはその一つから、強い魔法少女を探してやってきたらしい。

（強い魔法少女か…：せめて、魔法少年であってほしかったなあ）

「みことなら、素質はある。立派な魔法少女になれる。おれが保証するぜ」

「それは保証してくれなくていい。女の子としての素質なんていらなから」

なぜ魔法少女なのか、というそれは世界の特性らしい。世界が男性を選ぶか、女性を選ぶかはその世界によって決まっている。

やはり肉体的、純粋な戦闘力では男性のほうが優れるので、魔力でそれをブーストするのが男性ヒーローだ。

一方、純粋な魔力の大きさと勝負するのが女性ヒーロー（ヒロインか）なのだそう。新たな生命を宿す力が、魔力の大きさに関係するという。

（女の時は世界に選ばれるけど、男のときはダメか…）

がつくりきたみことが席を立つと、キンケイドが飛び上がって文句を言う。

「お、おいつ。まだ敵について説明してないだろうっ」

「それはまた今度聞くよ…」

「おい、まだ魔法少女として名乗りの大事さについて話してないぞっ」

「だからさ、今度。今度にしてくれれば…」

がつくりとうなだれたみことの悄然とした様子に、キンケイドはやけに人間くさ

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

いしぐきで肩をすくめてみせた。

地方都市とはいえ繁華街はそれなりに人も多い。ここ貴船市は県庁所在地ほどではないが、まあ発展しているほうで人口流出も多少はあるものの比較的落ち着いている。

その町中を小柄な少年が歩いている。人探しでもしているのか視線が落ち着かないが、それで歩みが遅くならないのは、年若い男性ならではだ。

週末の昼下がり、学校側の都合で部活動がなかったみことはキンケイドの言葉に従って街を歩いていた。

（本当に、このあたりに敵がいるのか？）

（ああ。それは間違いない）

サンガラスの下で真剣な表情のキンケイドはぬいぐるみのふりをしている。マスコットのふりをして堂々と学生服のポケットから顔を出していた。

（たぶん、前回と同じように雑魚だろうが……たぶん、索敵とか偵察ってやつさ）
確かにサンガラスをかけたヒヨコ、それも黄金色となれば動きさえしなければオモチャのヒヨコとしか思えない。

（けっこう知能的なんだ？）

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

前回の黒い獣はあまり知能が高そうではなかった。動物としては頭がよい感じだったけれど、会話も成立しなかったし。

（前回の奴は分身だからな。本体は会話もできるしかなり強いぞ）

みことの心を読んでいるのかキンケイドの言葉は的確だった。というか、ここまで心があけすけだと問題だと思う。

（なあ、ぼくの心読んでるよな？ やめてくれよ）

（ん？ いやだったら、止めればいい。遮蔽すればいいじゃないか）

キンケイドの知識が流れ込んでくる。魔法少女……契約者と守護獣の間には強力な精神的紐帯が結ばれるが、精神遮蔽により思考を遮断できるのでそうだ。

（え、ええと……これでいいのかな。）

心の中に壁を作るイメージ。それだけでキンケイドの意識が直ぐ隣にあるような感覚から、隣の部屋や家の外、といった感じに変わっていき、お互いの思考の行き来がなくなっていくのがわかる。

（なるほど。というか最初から教えてくれよ）

（オーケー。それでいい。それより気をつける。近いぞ）

ふと少年の視線が止まった。止まったというよりは特定の人物を捕捉したままに

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

なり、その視線の先には、セーラー服姿の女の子がいる。

(あれは……)

ほっそりとした後ろ姿だけで彼女だとわかる。日向翔子。同じクラスで家も比較的近い。同じ団地の中の別の棟に住んでいて、幼なじみというには微妙な距離感の人物だった。

ロングの髪をいくつかに分けて編んでまとめた独特の髪型は女らしさとさっぱりした活動的な雰囲気と両立している。セーラーカラーからのぞく細く白いうなじにドキリとする。(やっぱり翔子ちゃんだ。この時間になんて、珍しいな)

学校では女装を強制されたみことにたいして同情的というか、放っておいてくれる数少ない女子生徒だ。ほとんどの女子と違ってみことの女装を採点したり、キャアキャア騒いだりもしない。それだけで涙が出るほどにありがたい。

(こら、何を見てる。近くに敵がいるんだぞ)

(わ、わかってるよっ)

そうだ。この前みたいな怪物がいるならやっつけないといけない。ケンイチだつて襲われそうになっていたし、日向翔子を危ない目にあわせるわけにはいかない。

キンケイドに指摘されて顔を赤くしてしまった少年は自分に言い聞かせながらあたりを窺う。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

（強い魔力を持つものは、その魔力を完全に隠すことはできないんだっただよな）

（ああ。隠蔽魔法を使えば別だが、ふつうの怪物は魔法を使えないからな）

今のようにキンケイドが魔力を感じるということは、魔法を使っている魔法使いか、モンスターか、そうでなければ畏、ということになる。キンケイドとみことは慎重に周囲を確認しながら歩き続ける。

（心配ではこのあたりのはずなんだが……）

「！」

気づいた瞬間には翔子は目の前にいた。しかも、こちらを向いて微笑んでいる。ただそれだけで心臓が跳ね上がりそうだというのに距離が近い。彼我の距離はわずか一メートルほどだろうか。手を伸ばせば彼女の薄い肩に、よい香りのする髪に触れてしまえる近さだ。思わず唾を飲み込んでしまった。

「鷹月君じゃない。こんにちはー」

無邪気な、明るい笑顔。日向翔子はさっぱりした性格で男女ともに人気のあるタイプだ。クラスでは誰とでも会話するし、時にはケンカする。

それでもたいていは彼女が先に謝ってケンカも終わってしまう。明るくしかもタイミングのよい謝罪は後味を悪くせずとその場を収めてしまうのだった。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

「ひ、日向さん、こんにちはっ」

声がうわずっていた。彼女と学校以外で、しかも二人きりで会うなんてずいぶん久しぶりな気がする。

流行と学生たちの意見と伝統に考慮して数年前に変更されたセーラー服はスカートも短めになっていて、彼女の軽やかな雰囲気によく合っていた。

「あははっ。鷹月君、キョドってるー。びっくりした？」

日向翔子は、今でこそ女らしい少女だが、運動神経はかなりいい。というか、部活動は手芸部などの文化部に所属しているものの、運動部からそれを惜しまれるレベルだ。

その抜群の瞬発力や運動センスは本職の運動部に匹敵する。今も、みことの注意がそれた隙に一気に距離をつめてきたのだろう。

「ああ、びっくりしたよ。いきなり目の前にいるんだもの」

長い黒髪と、黒目がちな大きな目。背はみことと同じくらいで女の子としては普通くらい。ちよつと幼い雰囲気と持ち前の明るさが彼女の笑顔を特別なものにして
いる。

「うふふっ。大成功ね」

ちよつとしたいたずらが成功した喜びに、口元にこぼれそうな笑み。ずいぶん前

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

から彼女はみことにとって特別な女の子だった。

幼なじみというにはちよつと微妙な距離感の大規模団地の中の子供同士。それでもクラスの中では会話も多いほうだろう。そんな彼女が気になる存在になったのは、中学校の入学式の時だった。

「町中では勘弁してほしいな。声が出るところだった」

「えへへ。ごめんね。知ってる顔を見つけたから、つい」

それまで、シヨークと呼び捨てにしていた彼女のセーラー服姿に心臓が跳ね上がるような衝撃を受けたみことは、つい彼女のことを『日向さん』と呼んでしまった。

それに応えた時の、彼女のはにかんだ笑顔が十二歳の少年の胸に住み着いたのだ。

それ以来、日向翔子は常に一番気になる女の子だった。

「ねえねえ。それ、ちよつと見せてもらっていい？」

キラキラした瞳が学生服のポケットに向けられている。そこで硬直しているのはどうみてもヌイグルミにしか見えないナズの生き物、キンケイドだ。

「あ、ああつ。もちろんっ」

（ちよつ、おいつ、みこと——っ）

正直なところ、翔子に比べればキンケイドの存在などたいしたことない。考えるまでもなく黄金色のヒヨコが手に乗せられ、彼女の前に差し出されていた。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

「うわー、すごくよくできてるっ」

目を輝かせて手を伸ばすこの娘のためなら、なんでも差し出せそうだ。

(こ、こらっ。にぎるなっ。モフモフするなっ)

こんな事態に慣れていないのか、少女の手の中で混乱する守護獣の思考が伝わってくるのに、内心ニヤニヤしてしまった。

「すごい。このサングラス、はずせるんだ。凝ってるなー」

もともと生きているし魔法世界の生き物なのだから、既製品とは別格のデキなのは当たり前だ。手芸部の翔子としては驚異と興味を感じずにはいられないらしい。

(こ、こらっ。オレのアイデンティティを外すなっ。あっ、眩しいっ)

サングラスを外されてしまったキンケイドの瞳は当たり前だが丸かった。鳥類なのだから当たり前だが、すごくつぶらな瞳だ。少年が吹き出しそうになるほどだ。

「すごくいい手触り。こんな風に羽毛っぽく植毛できるんだねー」

豊かな髪をいくつかに分けて編んでいるのが揺れる。ほっそりとした喉元の白さとのコントラストが少年の心を落ち着かなくさせる。

間近で見る繊細な少女の肢体は、それだけでドキドキしてしまう蠱惑に満ちていた。

「うふふっ。かわいい、かわいい♪」

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

（お、おいつ。おれはぬいぐるみじゃないっ。みこと、なんとかしてくれっ）
うれしそうに頬ずりする様子に、思わずぬいぐるみ状のナゾの生物に嫉妬してしまふことだったが、困惑するキンケイドの思考が伝わってくると、ちよっと気の毒な気もした。

「ねえねえ。これ、どこで買ったの？ 私も欲しいっ」

身体を固くしているひヒヨコもどきを抱きしめながら翔子が瞳をキラキラさせている。気づけば肩も触れてしまいそうな、友達以上の距離だ。心臓がバクバクと早鐘を打つのを感ずる。

ショーコから翔子ちゃんと、呼び方がいたりきたりしていたのは小学校までだったろうか。日向さん、と呼ぶようになってからは彼女の名前は心の中でしか呼んでいない。

「あー、これは……その、知り合いがくれたもので、わかんないや。ごめん」

「そっかー。どこかでキミの兄弟姉妹と出会えるといいなー」

幸せそうな、とろけそうな笑顔でヒヨコのぬいぐるみを撫でる少女。本物だとはもちろん思っていない。その視線の先で、ヒヨコの尻尾がかすかにプルプルしている。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

つたが、その思考に思わず目が点になった。

（ちよ、待って……おうっ、こ、これはっ……おうふっ……）

ぬいぐるみにしか見えないナズの生き物の思考は、美少女になで回される快感と恍惚に満ちていた。

（てのひらやわらかいっ……ま、まずいってばっ。そんなところまでっ）

翔子の柔らかいなめらかなてのひらとほっそりとした指の繊細さ。丁寧に、そして優しくなで回してくる感触が意外なほどの快感だ。間接的とはいえ、みことの背筋がゾクリとするほどだ。

「ちよ、ちよっごめんね。ぼく、用事があるから、また今度」

「あら、残念。このヒヨコちゃん、ストラップとかあったほうがいいわよ」

ちよっただけ不満そうにヒヨコを手放した翔子は、にっこりと笑って手を振った。

「うん、それじゃあまた、学校で」

「バイバイ、鷹月君。ヒヨコちゃん、無くしちゃダメだよー」

手を振り合って別れたみことだったが、手の中でぐったりとしているキンケイドはなんだか目を潤ませていて気持ち悪い。すぐにサングラスで隠されたのにホツとする。

（おい、キンケイド。なんだよ、さっきのは。翔子ちゃんを汚すなっ）

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

（ち、違うっ。触ってきたのは向こうだ。オレは被害者だっ）

二人がそんなしよもない会話をしていたその瞬間だった。

キーン——ッ！

かすかな、甲高い電子音のような音とともに世界から鮮やかさが失われていく。異空間だ。少年があたりを見渡した時には、色彩とともに人々の姿が消えていく。

「敵だっ。仕掛けてくるぞっ」

「あ、ああっ。わかったっ」

また女装かと思うと頭が痛くなるが、背に腹は変えられない。普通の人では対抗手段がない怪物を野放しにはできない。

「魔法少女みこと、変身だっ」

「だからぼくは少女じゃない。お・と・こっ！」

変身の魔力が発動して衣服が失われていく瞬間、みことは見た。街角にたった一つだけ人影が残っている。前回のケンイチのときと同じだ。一人だけ、この世界に取り残されている。

「あ、あれは……翔子ちゃんっ」

思わず、昔の呼び方が出てしまった。やはりケンイチの時と同じで翔子が『停止』している。色彩こそ残っているし瞳の輝きもそのままだが、ピクリとも動かない。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

軽やかなステップで小走りでも画材店の扉に向かっていている状態のままだ。

「ケンイチに続き日向さんまで。許さないぞっ……て、ううっ」

全身に展開された魔力がコスチュームに変化し変身終了のはずが、いきなり全身が熱くなり、視界がぼやけそうな苦痛が襲ってくる。

「こ、これは……やめろっ、キンケイドッ」

「非常事態だ、あきらめろっ」

苦痛は前回よりもだいぶ少なかったし、時間もかからなかったけれど身体全体が作り替えられていくような違和感と苦痛は前回も体験したアレに間違いない。

「いけ、みことっ。女の時ならおまえは強いっ」

男の時にかかっている魔力制限を、最初から解除したということらしい。だが、それはもちろんみことの意志ではない。男なのに無理矢理女に性転換させられる怒りと屈辱に視界が暗くなりそうだ。

(く、くそっ。ぼくは……男なのにつ)

視界のすみに、ゆらゆらと揺らめく緑色の影を見つけた。あれが今回の敵だろう。向こうもこちらを認識したのが、直感的にわかった。

みことが女の時という言葉は、それ自体が本来矛盾だ。なぜなら、鷹月みことの

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

性別は男だからだ。だが、さらなる矛盾が少年を襲っていた。

「こ、このやろうっ。無理矢理やったなっ。こんな格好にしやがってっ」

「苦戦して、敵にやられるよりいいだろうっ」

黄金のヒヨコと女装少年……いや、女性化少年はにらみあっていた。

「ぼくは女になんかなりたくないし、本当は女装だっていやなんだっ」

「しかたないだろう。そのデザインは『世界』による決定なんだぞっ」

変身直後に性転換させられたみことは、すでに完全な女の子になってしまっている。あいかわらず、かわいらしくもちよっときわどい、言ってみれば『ねらった』コスチュームだ。

「せっかく似合っているんだ。開き直れよっ。むしろ喜べっ」

「喜べるかっ。僕の黒歴史をこれ以上増やすなっ。無理矢理着せやがってっ」

みことの指さすのは自分の胸。襟元の下、胸元は大きく開いて胸の谷間がはつきりわかる。プロテクター形状がただでさえボリュームたっぷりの胸元を寄せるかたちで強調し、くつきりと魅惑の谷間が生まれていた。

（ただでさえ狙っている衣装だったのに、女になってまで……）

カラーと一体化した、鳥の翼をイメージしたマント。清楚なカッチリした襟元と、無防備な胸元や大きく開いた背中中の肌の差がなんとも誘惑的だ。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

胸元からプロテクターと一体化したスカートに続くお腹部分の生地の色はピンクで、しかもうつすらと透けているところが明らかに狙っている。

（ここは透かしちゃだめだろっ、ぜったいっ）

しかも、透けている部分はスカートで多少隠れているが、下腹部の微妙なラインギリギリまで半透けだったりする。デザイン担当者出てこい、と叫びたいみことだった。

「しかたないだろう。一人の魔法少女に支給されるコスチュームは原則一種類なんだ」

「しかたがなくないつ。何度も言うが、ぼくは男だっ」

ビシッと指さす先が空飛ぶヒヨコなのはなんとも締まらないが、そのほっそりとした腕も優美なスリーブに覆われている。縁取りが端正な印象なのはショートブーツと同様。伸びやかな脚はもピンク色のタイツに覆われているが、内腿は肌が見える形になっていて、ここもやはり狙っているのではないか。

「わ、わかった。わかったから、戦いに集中しろ、みことっ。油断するなっ」

「いや、だってこいつ、あんまり動かないし。弱そうだよ」

ちら、と視線だけで敵の姿を確認する。なんだか緑色のゼリー状のスライムっぽい敵が、たぶたぶと身体を揺らしながら白黒の色を失った世界でこちらを窺ってい

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

る。

キンケイドに感知された怪物は、すぐさま異空間を展開し、戦闘状態に突入したものの、それ以降にもしてこなかったのだ。

「ばっかっ。おまえの戦力を分析してるんだよ。そいつはミミックだぞっ」

「ミミック？ あの宝箱の？」

ゲーム知識のミミックを想像したみことの前でスライムっぽい敵がようやく動き出す。

あまり動かないので、敵じゃないのかと最初は思ったくらいだが、この異空間で動いているのは、強い魔力を持つもの。つまり魔法少女とその仲間か敵だけのはずなのだった。

ずるるるっ——にゆるっ、にゆるるるるっ。

さすがに警戒の姿勢をとったみことの前で、のっぺりとだらしなく広がっていたスライムが一カ所に体積を集中して柱のように変化する。

「そいつは不定形生物だ。変身させるなっ」

「あ、ああっ、わかった」

キンケイドの言葉で、なんとなく敵の性質がわかる。いろいろな姿に変身して戦うモンスターらしい。それなら、確かに変身する前に叩くべきだ。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

「ライトフェザーッ！」

鳥の翼を模したマントが翻り、光の羽根が内側に浮かぶのを二本ずつ両手に取る。二度めの変身で、多少は勝手がわかってきた。敵の魔力量は大したことはない。強敵ではないはずだ。

「いくぞ、アメーバっぽいモンスターっ」

光の羽根を四つ一気に投擲する。本式の手裏剣では無理な話だがそこは魔法少女の武器だ。放たれた四つの羽根はそのまま光の矢となって空を裂く。

「どうだっ。——って、そんなんっ」

ジュルルルッ、ビシュッ、ヒュルルル——ッ！

円柱が溶け崩れたような姿になった不定形生物がが突如として俊敏な動きを見せる。四つの光の矢に対して四つの偽足を出し、触手となった偽足が光の矢と相殺したのだ。

「そいつらには通常攻撃は効きづらい。火か、氷が有効のはずだ」

「わ、わかったけど、先に言えよっ」

弱点はゲームとかとだいたい同じなのか、と妙な納得をしながら契約によって得た知識をさぐると、火や氷、水などのいわゆる元素系の魔法があることがわかる。

氷はともかく、水はたぶん効かないだろうと、火の魔法に決める。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

「ええと、力の象徴、魔を払い不浄を焼き尽くすもの、炎よ——って、うわわっ」
呪文の詠唱が終わるのを、スライムは待ってくれなかった。偽足を次々に出し、細くなった偽足が触手となって襲ってくる。そのスピードは意外なほどに早く、そのうちの一本が左腕に巻き付いていた。

「馬鹿っ、油断するなといっただろう」

「あっ、ああ。わかってるっ。ライトフェザー」

触手の力そのものは強いが、長い触手の先では引っ張る以外の力は大きくなさそうだ。

引き寄せられる前に光の羽根をナイフのように持ち替えて触手を断ち切る。

ブチュツ！

いやな音をたてて触手がちぎれ、腕が自由になる。ありがたいのは、体液がほとんど出ていないことだ。これで血とかが吹き出たりして、それをかぶってしまうのはちよつと考えたくない。

「力の象徴、魔を払い不浄を焼き尽くすもの、炎よ、ここにっ……むぐっ」

みことの眼前に光が集中して赤い炎がゆらめいたかと思うと、すぐにブレて消えてまう。みことの呪文詠唱がとぎれたせいだ。

「お、おい、みこと——？。しまった。障壁、瞬間展開っ！」

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

キンケイドの焦った声とともにみことの全身を覆うバリアが一瞬だけ発生し、右腕に巻き付いた触手がゼリー状になってみことの上半身を覆っていたのをはじき飛ばす。

「ごほっ、ごほっ…あ、ありがとう、キンケイド。ううっ、へんな味だあ…」

「ば、馬鹿っ。何か飲まされたのかっ」

「う、うん。でも大丈夫。こんな奴に負けるもんかっ」

視界には翔子の姿だっている。翔子を傷つけさせたりは、絶対にしない。この程度の気持ち悪さでは、戦意は失わない。みことの瞳には確かな決意の色があった。

「今振り払ったスライムも全部焼き尽くせっ。本体に合流させるなっ」

「何かまずいんだな。わかったっ」

今度こそ発動した炎の魔法。目の前に出現した炎のゆらめきを、光の羽根にまどわせる。炎の短剣といった感じになったのを使って、ずりずりと本体に向かって這い寄ろうとするスライムを火に包む。ゲームと同じく火に弱いのか、スライムは見る見るうちに小さくなって消えてしまった。

「よーし、いいぞ。その要領で、本体もすべて焼いてしまえ」

「わかってるっ」

キンケイドの言葉にうなずきながら、みことはスライムに向かって突進する。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

「いいか、そいつは偵察用だ。みことの情報を持ち帰るのが任務なんだ」

「なんでそんなことがわかるんだよっ」

反論してすぐに、情報集めはどんなゲームでも基本だし実戦でもそうだろうと気づいて恥ずかしくなったみことだが、キンケイドはそんなことは気にしないほど興奮しているようだった。

「この街は妙に魔力の高い人間が多い。敵はまだみことを特定できていないはずだから」

「そ、それって……翔子ちゃんがあそこにいるのと関係がある？」

敵の攻撃の速度そのものは前回の黒い獣よりも遅い。幾度か避けていくうちにパターンが読めてくる。

触手が襲ってくるのには振り回してくると、直線的に伸ばしてくると二種類あるようだ。振り回してくるのは、うまくやれば避けるついでに炎の短剣で断ち切ることもできそうなことに気づく。情報集めは、やはり大事だ。

「ああ、あのケンイチとやらも、ヒナタ・シヨウコとやらも魔力がある」

この異空間では、魔力のないものは存在できない。逆に言えば、そこで動けるみことは大きな魔力を持ち、それほどではない憲一や翔子は動けないが、存在はできると言うことになる。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

「この街には魔法使いの素質のある人間が多いみたいだな」

「それって、ぼくじゃなくてもいいんじゃないか？」

ヒュンツ——！

弧を描いて襲ってくる触手を避けながら、炎の短剣で断ち切る。あまり大きなパーツは無理だが、ある程度小さなパーツはそのまま炎に包んで焼き尽くすことができるようだ。

（いけるか？ ——よしっ）

今回はうまく炎に包むことができた。

サッカーで鍛えた身のこなしで巧みにステップを刻み、触手に捕まれないように注意する。特に、直線的に伸びてくる触手は避けるしかない。

（そんなにいっぱい魔法の才能があるなら、他の人だっていいよな、きっと）

ヒラリ、ヒラリと触手をの攻撃をかわすたびに可愛いデザインのマントとスカートがふわりと舞い上がる。

（ぼくがこんな格好で戦わなくても大丈夫じゃないのか？）

めくれあがったスカートからちらり、ちらりと見えるのはいわゆる女性ものもの下着ではなく、レオタード風の衣装の下腹部やお尻だ。

構造としてはたとえばアニメによくある変身ヒロインの衣装に近いかもしれない

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

い。

「他じゃ無理だ。残念ながら魔力の量でみことは断トツだ。間違いなくな」

「そうなのか……」

内心ガツクリきながらも、触手の攻撃を避けながら少しずつスライム本体との距離をつめていく。

幾度も触手を消滅させたせいか、敵の魔力の量も減ってきている。このまま繰り返すだけで敵を弱らせていくことができそうだ。

（あれっ？ これって……）

セーラー服姿の少女の姿が先程より大きくなっていることにギクリとする。距離がつかまっているのだ。じわじわとスライムは翔子の近くに移動しつつあった。

（お、おい、キンケイド、このスライム、もしかして……）

（ああ、その女の子を取り込んで魔力を回復するつもりだろうな）

もしかしたら、これらの敵は、戦闘中に無関係の人を喰うつもりで異空間にとどめているのではないか。そう思い至った少年少女の胸に爆発的な怒りが広がる。

（そんなことさせるもんか、やつつけてやるっ）

万一を考え、翔子とスライム怪物の間に回り込むと、光の羽根をもう一本取り出し、炎をまとわせる。炎の短剣二刀流だ。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

ギンッ！

思ったとおり、二本の短剣を交差すれば触手をまともに受けることもできる。避けるしかないと思っていた直線的な、槍状触手も角度を変えてはじくようにすれば、防御と同時に、触手を断ち切ることもできる。

（いいぞ、みこと。やっぱりおまえ、魔法少女の才能あるぞっ）

キンケイドの思考に賛嘆があるのに、ちよつと気をよくするが、少女と言われるのは、少年の自意識が許さない。

（だから、ぼくは男だっ）

そう言いながら、続けざまに触手を切り捨てる。積極的な戦いで一気に怪物の魔力も体積も減少していた。これなら勝てる。そう確信した瞬間、ガクリと膝が崩れた。

（え？ なに、これ……）

疲労が蓄積して、ふと集中がとぎれた時に似ている。まるで膝から下がいきなり消失したように、体重を支えてくれなくなり、倒れこみそうになってしまう。

（お、おいつ。みこと、どうしたっ）

たたらを踏んで立ち止まったみことをめがけて、風きり音とともに弧を描く触手が襲いかかってくる。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

（あれ？ 魔力の使いすぎとかじゃ、ないよな。これは……）

疲労でもない。純粹に肉体の異常だと直感する。麻痺だ。先程スライムに飲まれた液体に毒が入っていたのだろう。背筋が冷たく冷えていくのを感じながら、身をかがめて触手を避ける。

「動きを止めるなっ。捕まるぞっ」

「わ、わかっているけどっ。身体が動かないんだっ」

足だけじゃない。手の力も入らなくなっている。次の触手は直線的な、槍のような攻撃だ。身をかがめた状態から、転がるようにして避けるが、ほとんど倒れ込むような姿勢になってしまった。

毒――。

みこととキンケイドはほぼ同時に先ほどのスライムに何かを飲まされたのを思い出す。

（あれかつ。あれに毒が入っていたんだっ）

スライムの攻撃が比較的単調なのが幸いした。思うように動かない身体をなんとか操りながら触手の攻撃をかわしていく。

「キンケイド！ 魔法でなんとかならないのかっ？」

「毒は解毒剤じゃないと難しいっ。時間を稼いで回復を待てっ」

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

契約による知識によれば、魔法少女の肉体は活性化しているために毒にも強く、たいていの毒は時間さえかければ自力で解毒できるらしい。キンケイドが怪物の体液から解毒剤を作る方法も検討していることが伝わってくるが、いかんせん時間がない。

解毒の魔法も毒の種類がわからなければ難しい。魔法使いになってからの経験が浅いみことは、防御の呪文もまだ使ったことがないほどだ。

「くっ、ま、まだまだっ。負けるもんかっ」

片膝をついた状態で、防御に徹する。襲ってくる触手に狙いを定めて、炎の短剣を交差させた状態でなんとか攻撃を受けるが、断ち切ることはできなかった。

ギンツ——！ ブシュウツ！

「うわっ……痛うっ」

大きく切り裂かれた触手が激しくのたうち、姿勢を崩されてしまう。むしろ切断できなかったために、触手の運動エネルギーをまともに受けてしまったのだ。腕がしびれ、炎の短剣も手から落ちてしまう。

「ぼ、防御魔法を使えっ。呪文は——っ」

「わ、わかったっ」

キンケイドの思考に合わせて呪文を詠唱するが、敵がそれを待ってくれる道理は

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

ない。呪文の詠唱をしつつ、もう転がるようにして触手を避けていく。だが、毒が回ってきたのか手足の力が急速に奪われていく。

(よ、避けきれない——っ)

もう少しで呪文の詠唱が完成するところで、槍状触手が襲ってくる。直前に姿勢を崩していたみことは、すぐには回避行動をとれない状態だ。衝撃を覚悟したみことの前に、金色の光が猛スピードで突っ込んできて、触手と交差した。

バンッ——！

破裂音にも似た音とともに、金色のヒヨコと触手は衝突し、触手はわずかに方向をずらし、結果としてみことからわずかに逸れた。

そして、ナゾの生き物は大きくはね飛ばされ道路のアスファルトにたたきつけられる。

(キ、キンケイドツッ)

槍のような直線的な攻撃は、側面からの力で方向を逸らしやすい。それは間違っていない。だが、軽く小さいものが、その数倍の大きさの敵の攻撃を逸らすには、運動エネルギー、つまり速度を高めるしかない。自らを弾丸と化した守護獣の捨て身の攻撃だった。

(な、なんとか呪文は完成したな……耐えろ、よ。……こ、と……)

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

そのままキンケイドの意識が途絶える。どうやら気絶したらしい。魔力のつながりが消えてはいないから、死んではいけないのはわかる。ホツとしたみことの前に、幾本もの触手がゆらゆらと揺れていた。

（大丈夫さ。防御呪文だって完成したんだからな。キンケイド）

正直なところ、防御呪文も最小限の、一番早く完成する簡易的なものだ。それでも守護獣が身体を張ってくれのだ。契約者としてはここで負けるわけにはいかない。

（大丈夫。時間さえ稼げば毒は抜けるんだから……）

ぴくりとも動かないヒヨコには怪物も意識を向けていないことを確認しながら、心の中でつぶやく。

（ぼくだって男だ。毒が抜けるまで持ちこたえてみせるさ）

にゆるり……。手足に触手が絡んでくるのを感じながらも、少年少女は固く決心するのだった。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

2

触手怪物のエロ攻撃

はあっ、はあっ、はあっ——

自分の呼吸音が、まるで部活での模擬試合の直後のように荒く聞こえる。違うのは、どこか甘さが呼吸に混じっていること。甘酸っぱい汗の香りすらもが、若い女性の肌の香りとあいまって魅惑的だ。

（ち、ちくしょう。なんだ、これ。攻撃してくるんじゃないのかよ）

目の前には、緑色のスライム本体がある。潤んだ瞳でにらみつけるしか今のみにとにできることはない。

（ゲームならボタン連打とかで脱出できるのにつ）

四肢を触手からめ取られ、宙づりにされているのだ。しなやかな腕が、伸びやかな脚が触手に引き延ばされるようにして、大の字に拘束されていた。

麻痺している上に四肢がほとんど伸びきってしまったので、手足はほとんど動かない。辛うじて動くのは指程度だが、それも十分には力が入らない。

防御呪文が効いているせいか苦痛はないものの、ほとんど身動きはとれないし、

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

細い触手が全身を這い回るのも甘受するしかない。

びくんっ。

「うっ、ひゃううっ」

背筋が跳ねるようにうねる。思わず変な声が出てしまった。全身をぬめぬめとした触手が這い回る。気持ち悪いはずなのに、敏感すぎる肌と活性化した感覚は、気持ち悪さと同時にそれを快感としてとらえてしまう。

（ううっ、気持ち悪い…それなのに気持ちいいって、なんだよっ）

しかも、触手からみつかれた部分のコスチュームが少しずつ透けてきているのに気づいた。溶かされているのだ。

（やばっ。このままじゃっ、見えちゃうぞっ）

ずりずりと舐めずりまわすようからみつき、うごめく触手が全身にまんべんなく溶解液らしきものをまぶし、なすりつけているのにも抵抗のしようがない。

「くそっ。このエロススライムめっ。離せよっ」

力の入らない手足を動かし、身体をひねって脱出しようとするみことだったが、四肢にからみついた触手はびくともしない。

それどころか、触手の分泌する粘液がコスチュームを濡らし、生地を少しずつ溶解している。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

「くっ、やめろっ。気色悪いっ……というかぼくは男なんだぞっ」

スライム怪物は不定形生物というだけあって、時間さえかければいろいろな器官を創出できるらしい。半透明だった触手に色がつき、吸盤とか繊毛とかが出現していた。

（言葉は通じないだろうけど、なんとかしないとっ）

肉色に変化した触手の表面は今は微細な繊毛と吸盤に覆われ、コスチュームの上から、防御呪文に守られているはずの肌に羽毛で撫でるような、また唇で吸いつき、キスと同時に吸い上げるような刺激を送り込んでくる。

「ひっ……す、吸うなっ。撫でるなさわるなっ……くっ、んんんっ」

（言ったろう？ こいつはみことの情報を収集しているんだ）

キンケイドの思考が伝わってくる。意識はすぐに回復したものの、ダメージは大きいようで身動きはとれないらしい。

（これが情報収集かよっ。ただのエロモンスターじゃないかっ）

触手はいつの間にか緑だけでなく、銀灰色の蛇のようであったりする。腹の側には繊毛と吸盤が、そして先端はいくつもの細い触手が出ていて、コスチュームの隙間から内部に進入しようとしていた。

「う、うわっ、入ってくるっ……ひ、ひいっ、き、気持ち悪いっ」

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

(とうか、防御呪文効いてないだろ、これっ)

必死にもがくみことだったが、肩口からの触手の侵入に思わず身体を震わせてしまった。無防備な部分の多いコスチュームがいつにも増して恨めしい。

(大丈夫だ。ちゃんと効いているぞ。体内には入れないし、ダメージはないだろう?)

肉体、つまり肌や髪の毛を含んだみこと自身にはダメージが通らないが、コスチュームは別であることが伝わってくる。

(ちよっ、脱がされほうだいつてことじゃんかっ)

(魔法をちゃんと覚えていないみことが悪いんだらうっ)

(うぐっ…それは、そうだけど)

キンケイドはそれ以上は言わない。少年が反省していることは理解しているようだ。さらにいくつかの情報を伝えてくれる。

ダメージではない刺激などは普通にみこと感覚に伝えられる、ということらしい。敵と認識してさえいれば口腔内などにも進入できないが、耳をくすぐったり、唇をどうにかしたりはできてしまうようだ。

契約の知識によれば防御呪文と感覚遮断の魔法は違うらしい。魔法は魔力だけでなく、さまざまな感覚も重要なので基本的に感覚の遮断はしないということだ。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

ということとは、敏感な状態の身体を撫でられたりすれば、ダイレクトに感じてしまうということ。魔力で活性化した身体は敏感すぎるほどに敏感なのだ。

「怪我とかはないけど、心のダメージが大きすぎるっ」

（自業自得だ。嫌だったら、ちゃんと呪文の勉強もしておけよっ）

思わず声に出してしまったが、それを言われると一言もない。女装や女性化への抵抗が大きすぎてキンケイドの話をまともに聞こうとしないのはみことのほうだった。

（さすがの魔力だな、みこと。普通だったらもう完全に溶かされているぞ）

キンケイドによれば、みことの大きな魔力容量がコスチュームの防御力にも関係していて、触手の溶解液にも比較的持ちこたえている、ということらしい。

（ううっ。勘弁してくれよお。早く毒が抜けないと本当に脱がされちゃう）

早く身体の解毒機能が働いてくれないと、脱がされるどころか、日向翔子を守ることもすらできないまま敵にやられてしまうことになる。

（ぬ、脱がされなくても、かなり……やばそうだな……ううっ）

体内に侵入したりはできなくても、身体を這い回ることにはできる。実際、肩口から侵入した触手だけでなく、マントの下の無防備な背中から侵入したものもいるようだ。

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

背中のくぼみを伝ってヌラヌラと粘液がお尻にまで垂れ落ちる感覚に身震いしてしまう。(く、くそっ。翔子ちゃんの目の前で、こんな……っ)

目線を下げれば『停止』したままの翔子の姿がある。意識はないだろうが、気になる少女の目の前の醜態は、みことにとってあまりの屈辱だった。

姿も変わって正体がばれることはそうないだろうが、少年少女の心は割り切れない。

(ただでさえ無防備なコスチュームなのに、これじゃあエ〇ゲじゃないかっ)

きっちりとした襟元の下、胸元の谷間からも細触手が侵入してくる。たわわに実った果実の感触を楽しむように、左の乳房のふくらみのふもとからとぐろを巻くように巻き付いてくる。

もともと肌に張り付く密着したコスチュームだけに、その下で触手がうごめいている様子はどうにもいやらしい。

「くっ……このっ。勝手放題して……あうっっ」

乳房全体を揉みたてられるだけでも変な感じなのに、先端の敏感な突起にくるりと巻き付かれた瞬間、思わず声が出てしまった。

にゆるん——。

その一瞬で堅く勃起してしまった乳首に、固く敏感になった乳輪に細い触手が食

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

い込み、せつなくもヒリつくような快感を生じさせる。

「ぎりー」。

防御呪文が効いているせいか、乳首を締め上げてくる触手も苦痛を感じるギリギリのところまで止まるのがもどかしくも、せつない。断続的に締め上げてくるのが妙な快感を生んでしまい、乳房全体が熱くなるのを感じる。

その一方では背中から侵入した細触手が溶解粘液を分泌しながら移動していく。脇腹をくすぐったかと思うとまた身体の正中線に戻ってきて、腰をそのまま下降する。

「う、うわっ、そこはダメだっ。やめろおっ……」

このままではヤバイ。そう直感した少年少女は髪を振り乱していやいやをする。身体をよじり、手足を引き寄せてなんとか脱出しようとするのだが、細触手は腰から大きく張り出すお尻の丸みの間に侵入する。

「は、離せよっ。このっ。ぼくの身体なんて探って嬉しいのかよっ……んんっ」

（みことの身体から魔力がにじみ出ている。それが目的なんだ）

キンケイドの思考が意味するものに、少年少女の思考も停止した。おそろおそろ、という感じでキンケイドに思考で尋ねる

（な、なあ。キンケイド。にじみ出る魔力って）

第二話 油断大敵、スライムの挑戦！

守護獣の反応が一瞬、止まった。

(あー、言いくいが、みこと。おまえの……)

(い、言わなくていいっ。くそっ、離せ、このスライムっ。う、うぐうっ)

体験版はここまでです。続いて第三話を紹介します。

第三話 強敵は、魔女

第三話

強敵は、
魔女

第三話 強敵は、魔女

1 女幹部ガーベラ

色を失った世界に、カラフルな衣装がひるがえる。

はじけるように鮮やかなステップを踏む少女が異形の怪物を相手に目も覚めるような連続攻撃を放っていた。

「それえっ。炎の連撃っ……そして、真空の刃っ！」

ほぼ同時に放たれた二つの魔法は実は時間差だ。

真空の刃が触手生物の体表を切り裂いたところに炎の弾が打ち込まれ、再生能力を封じ込めながら的確にダメージを与えていく。

先日の戦いに学んだみことの動きは素早いだけでなく的確だ。あれから幾度かの戦いを経てみことの技量は明らかに向上し、だいぶ戦い慣れしてきている。

（順調だな、みこと。これで名乗りをあげれば、カンペキなんだが）

（名乗るわけなだろ、魔法少女ミコトなんて、本名そのままじゃんか）

このところの戦いではキンケイドの力を借りることなく、みこと一人の力で怪物を撃破できている。

わずかだがキンケイドのコミカルなぬいぐるみ状の姿が大きくなったような気が

第三話 強敵は、魔女

する。守護獣としての力を回復するためにヒヨコの姿をとっているという話だから、回復が進んでいるということのはずだった。

（でもな、名乗りをあげないと十分な力が出ないんだぞ）

（勝てるから、いいじゃないか。本名を名乗るなんて、ぼくはごめんだっ）

なんでも、魔法少女への『変身』だけでは完全ではなく、名乗りをあげることによって『魔法少女システム』にログインしないと本来の力は発揮できないらしい。

（そうは言っても、もし本当に敵がヴァンダルだとすれば……）

キンケイドの心配をよそに、戦闘はみこと有利に進んでいる。

なるべく敵に近づかず、有利な間合いを心がける。それだけで魔力の強い魔法少女は強い。

杖を振るうだけで呪文詠唱なしで魔法が発動する。

魔法の杖に呪文登録された魔法なら短縮呪文だけで発動できることを教えられたみことは、いくつもの呪文登録を終えて実戦で使えるレベルにまで達していた。

「そこに隠れているのはわかってるんだ。出てこいっ」

あれほど苦戦した触手怪物も、今は冷静に対処できる。今回は魔法使いが陰に潜み、怪物を操っていることもお見通しだ。

みことの放った火の魔法がかき消されたかと思うと、標的だった空間に黒ずくめ

第三話 強敵は、魔女

の男の姿が浮かび上がる。

やけに体格がよく、黒覆面に全身タイト。はつきりいつて変態である。

「くっ…：我が隠れ身の術を見抜くとはっ」

黒覆面は呪文の詠唱とともに魔物に手を上げて指示をする。

ビュルビュルビュルッ！

直線的な触手と、弧を描く触手の連携攻撃だが、十分な間合いをとっているみことはあっさりとそれをかわし、二つの触手が交差するところに真空の刃を叩き込む。

グジュルルルッ—ッ！

ねらい通りに切断された触手が粘液を噴出しながら地面に落ちていく。本来発声器官を持たない不定形生物が、傷口と空気の圧縮による不気味な悲鳴を上げた。半透明の緑色を基調とした、いささかグロテスクなスライムの偽足がのたうち、痙攣する。すかさずそこに火の魔法を発動させ、本体に合流させずに焼きつくす。

「くっ、くそっ。これでもくらえっ」

「おっと。そんな攻撃にはやられないよっ」

怪物の陰から炎の矢が襲いかかるのを、マントを翻しながらかわす。今回の怪物には援護の魔法使いがついているが、今のみこにはさしたる脅威ではない。魔法使い同士の戦いでは、やはり魔力の大きさを言う。よほどの技量差がない限

第三話 強敵は、魔女

り、魔力の大きなみことが有利だ。

「くそっ……小娘がっ」

「小娘言うなっ。この変態っ」

触手怪物の背後から魔法攻撃をしかけてくる男。体術もなかなかで、うかつに近づいて接近戦に持ち込まれたら手強いだろう。

触手怪物と連携しての直接戦闘ではまず勝ち目はない。あくまでも魔術戦闘で、間合いを取りながら戦うしかない。

(こつちが男だとは言えないのが、くやしいな)

言葉のわかる敵を相手に、うかつなことはしゃべれない。正体がバレないように、慎重にならなければならないのだ。みことは距離をたもったまま呪文を唱え始めた

「ちっ……ここは退いてやるっ」

「そうはさせるか、覚悟しろっ」

触手怪物の後方で援護していた黒服面の男が背を向けるのに、強力な魔法を打ち込むために杖に魔力をこめた瞬間、その「声」が聞こえた。

「そうはさせないよ、お嬢ちゃん」

いきなりの言葉。ちよっとハスキーな、色っぽい声。思春期の少年なら思わず股

第三話 強敵は、魔女

間を意識してしまいそうな、甘くも艶っぽい、オンナの声だ。

それなのに思わず身構えてしまうような危険が、すぐそばに迫っていた。首筋の毛が逆立つ感覚だ。

「——っ」

ギインッ——！

魔法が発動する直前の魔力がみなぎる杖に、鋭い一撃が打ち込まれる。

長期休みのたびに田舎の伯父たちの道場でしごかれていなかったら、とても受け切れなかっただろう。しかも、今にも放たれるはずだった魔力が打ち消されている。

二撃目が打ち込まれるのを、バックステップで間合いをとってかわす。

みことの動きを予想していたのか、素早く引いて杖を構えた女は艶やかな唇の端をつり上げてかすかに笑ってみせた。

「へえ。今のを受けられるんだ。確かにいい動きだねえ」

「そ、今の呪文を相殺って！ なっ……何者っ？ どこから現れたっ」

みことは目を丸くしたまま突然現れた女を見定めようとする。

年齢は、二十歳以上三十歳以下。みことにはそれくらいしかわからないが、その魔力は今までの敵とは文字通り桁が違っている。

赤く波打つ豊かすぎるほどの長髪は炎の波のよう。背は高く、一般男性と同じく

第三話 強敵は、魔女

らいか。そして、衣服の上からもわかるほどの豊かな肉付きと、メリハリのきいた長い手足が誘惑的なシルエットを形作っている。

はつきりした顔立ちはひとつひとつのパーツもくつきりした、いわゆるガイジンのような彫りの深い顔立ちだ。

厚めの唇が色気を、くつきりした眉とつり目がちな目が意志の強さを感じさせる。そして、その瞳は秘めた魔力に内がわから光っているようで、気の弱いものなら目をそらしてしまいそうな迫力がある。

(これは、強い——！)

魔法の杖を構えている様子も、並の技量ではない。

武器を使つての戦いも自分より上だとはつきりわかる。いや、わかってしまう。

田舎の伯父たちにしごかれていたみことは段位こそとっていないものの、武術の心得はそれなりにある。そのみことの目から見て、この赤毛の女魔法使いの技量は明らかに高い。

(格上、か——か。まずいな。キンケイド、逃げられそうか?)

長身を生かした間合いの取り方と構えを見るだけで、うかつに背中を見せるのは危険だということがわかる。

襟を立てた上着は胸元あたりの布地がほとんどない挑発的な衣装に童貞少年の意

第三話 強敵は、魔女

識が吸い付けられてしまいそうだ。

身体にぴったりと張り付くようなコスチュームは凹凸のはっきりとした魅惑的な曲面をさらに強調する光沢と暗色の生地がいかにも目を引く。

長身とバストからヒップまでの曲線から太腿、ふくらはぎまでのラインが童貞少年の意識にはまぶしすぎる。

白いボディースーツはレオタード風だが布地がやけに少なく、乳房の頂点などは黒い布地がチューブブラとかビキニ水着のように覆っている。

ブーツや手袋が四肢の半ば以上を覆いながらも充実した肉体のラインを強調しているのがフェイティッシュで、長めのマントを翻しながら立つ姿は自信に満ちている。

(まずいぞ、みこと。こいつは……たぶん……)

守護獣と魔法少女少女の無言での会話はわずかな間だったが、赤髪の美女はみこととの反応を楽しむようにほほえんだ。

わずかな動作にも揺れる乳房が童貞少年の意識を刺激し、思わず目をそらしてしまいそうになる。

「初めまして、お嬢ちゃん。この世界の魔法少女さんだね？」

ちよつとつり目がちな、いかにも勝ち気そうでいて端正な印象の目。長いまつげ

第三話 強敵は、魔女

がくつきりとした顔立ちをさらに際立たせている。

大きな瞳の光が微笑とともにやわらぐが、放つ魔力はまったく揺るがない。すらりとした魔女が首を傾げてみせると、長く豊かな赤い髪が炎の波のように流れ、波打つ。

艶っぽく光沢を見せる唇からピンクの舌と白い歯が覗いた。

「ふふっ。私の名前はガーベラ。お嬢ちゃんの敵、ヴァンダルの指揮官さ」

ヴァンダル。その言葉に背筋が冷たくなるのを感じる。

キンケイドの予想は正しかったのだ。顔をこわばらせるみことに、赤毛の美女はにっこりと笑ってみせる。

「確かに、いい魔力と動きだねえ。本当に惜しいこと」

女魔術師は覆面の男に手を振ってみせると、黒ずくめが手を挙げて敬礼し姿を消していく。どうやら、部下の救出にやってきたらしい。

警戒するみことのみから見ても実力は明らかに高く、その力は魔法少女になって間もないみことには予想もできないレベルかもしれない。

「お嬢ちゃん、魔法少女なんだろう？ 名を名乗ってごらんよ」

「おまえらに名乗る名前なんかないっ」

魔法少女みこと。それがみことに与えられたコードネームというか、魔法少女と

第三話 強敵は、魔女

しての名前だ。そのまますぎてセンスがない以上に、本名モロバレでしやれにならない。

だが、相手の反応は意外なものだった。目を丸くしたかと思うと、吹き出すようにして笑い始めた。杖が下がり、構えが崩れるのもお構いなしだ。

「ぶっ……くくくつ。名なしだって？ こりゃあ傑作だね、あはははっ」

「な、何がおかしいっ」

「名乗りをあげない魔法少女は、システムに完全な接続ができない……だろう？」

長いまつげの下で、きらめく瞳には危険な光が宿っている。ガーベラの魔力が一気に高まっていく。ぞくり、と背筋が寒くなった。

自分以外で初めてみる、魔力の量。それはもしかしたらみこと自身にも匹敵するか、いや、それ以上。戦闘経験は文字通り比較にならないほど。圧倒的なまでの実力差を感じる。

「そんな半人前にこの私が出張ってきたなんて、がっかりだねえ？」

軽く杖を握り、構えなおすだけで跳びすさりたくなるような迫力だった。

杖が燐光を帯び、その周囲が歪んで見える。魔力が収束し、光をねじ曲げているらしい。マントが魔力の流れを受け、風をはらむように翻っている。

「さようなら、名前も知らない子猫ちゃん。恨みたいだけ恨みなさいな」

第三話 強敵は、魔女

文字通り、一撃で終わらせるつもりだ。色のない世界が暗く、寒くなっていく。光の、熱のエネルギーを吸収しているらしい。これもとてもみこにできる技術ではない。赤毛の魔女の底知れない実力に背筋が寒くなる。

(ヤバイな。ここは退くぞ、みこ)

(いいのか？ こんなヤバそうな奴放置しちゃって……)

(今のおまえじゃ勝てない。お前がやられるわけにはいかないんだ)

キンケイドの思念からも緊張が伝わってくる。やはりこの魔女は強敵なのだ。一瞬だけ悩んだみこは、決意をこめて口を開いた。

「くっ……。いいか、よく聞け。ぼくの名前はまこと。魔法少女マコトだっ」

(お、おいつ、みこ、それは、その名前は——っ)

名乗りをあげた瞬間、どこかで魔力の回路が繋がった。意識の奥に隠された魔力のチャンネルが開き、大きな魔力の流れと接続したのだ。

『我、契約を受諾せしもの。魔法少女マコト、確認——魔力流路、接続——』

どこからか声が聞こえてくるような気がした。意志のようなものが「魔法少女マコト」を認識し、魔法少女に魔力を送り込んでくるのがわかる。

今までとは違う、背後に誰かがついていてくれるような安心感を感じた。だが、それでも眼前の魔女は動じない。

第三話 強敵は、魔女

「魔法少女……マコト、だって……？ ふふふつ。本当に面白いコねえ」

長身のガーベラが魔力の収束する杖を振り上げる。身体を開いた片手剣のような構えに思わずみことも杖を構えながら自分を鼓舞する。

「何がおかしいっ」

「魔法少女マコトは、もう死んでいるからさ」

ざり、と誰かが歯ざしりをしたのを感じる。キンケイドだ。守護獣の意識が熱く激しく敵の言葉を否定している。キンケイドが何か知っていることはわかったが、今は問いただす余裕もなく、魔女の動きを窺うしかない。

「そして、魔法少女の名乗りは他の人間には使えない」

冷たい、見下す視線はそれでもまったく揺らぐこともなくみことを見つめている。

「つまり、魔法少女マコトの名乗りはお嬢ちゃん本人には意味がない。」

契約による知識が長身の美女の言葉を肯定している。そこまで敵が詳しいことに背筋が寒くなる。みことは敵のことをほとんど知らないというのに。

「つまり、お嬢ちゃんはこのガーベラを侮り、騙そうとしたってこと」

声は低く穏やかだが、陰を含んだまなざしが文字通り突き刺すような圧力を感じさせる。(気をつける、みこと。あの魔力、尋常じゃない)

(あ、ああっ。わかってるっ)

第三話 強敵は、魔女

ちろり、と美女の舌が艶やかな唇を湿らせる様子がまがまがしくも美しい。

「くすくすっ。マコトちゃん。化けの皮を……剥がしてあげるわ」

長身を、脚の長さを生かした間合いの広さ。それはみことにはないもので、田舎の伯父たちのしごきがなかったらとてもついていけなかったろう。鋭い音とともに魔女の杖が空を切り、サイドステップでかわしたみことが攻撃に転じる。

ギン——！

お互いの杖がまとう魔力がぶつかり合い、はじき合う。その衝撃そのものを抑える術式がなければ手がしびれていたかもしれない。

（キンケイド！ 魔力接続していても……それでも向こうが上みたいだっ）

（ヤバそうな時はおれが手を貸すから、とにかく消耗を抑えてスキを探すんだ！）

「へえ……。やるじゃない。さっきの名乗りで接続できているのかしら」

魔女は饒舌だった。楽しんでいいるからだ、と見当がつく。みことが背筋に冷たいものを感じる一撃を放ちながらその余裕があるらしい。

「驚いた。マコトの名前で本当に魔力接続できるなんて、何者かしら」

マントをはためかせ、くるくると二つのコマがぶつかり合うように二人は切り結ぶ。そのたびに武器に込められた魔力がお互いの武器を削ろうとぶつかりあい、文字通りの火花を散らす。『システム』に接続して強化された魔力で、やっど互角と

第三話 強敵は、魔女

いった感じだ。名乗りをあげていなかったらと思うと肝が冷える思いだった。

「でも、剣士ということなら、やっぱりマコトではないはずだけど」

「剣……これが、ボクの……？」

「そう。魔法少女マコトのメインの武器は弓だったと、聞いているわ」

怪訝そうな魔法少女の両目が見開かれる。いつの間にかみことは両手で杖を構えていた。いや、もはやそれは杖ではない。刃を持つ剣に変化していた。みことの適性に従って杖がその姿を変えたのだとわかる。

（動きを止めるな。敵は強いぞっ）

（ああ、わかってるっ）

キンケイドに言われるまでもない。魔力接続がされたことにより魔力だけなら互角かもしれないが、経験も体格も向こうが上なのだ。

魔女の身体が伸びきる攻撃の最大到達点をねらって必殺の一撃を繰り出すみことの前で、ガーベラがかすかに驚きの表情を浮かべながらも、巧みに杖の角度を変えて受けようとする。

「ていつ！」

横薙ぎに繰り出した一撃はみことの魔力を帯びたまま魔女の杖と交錯する。

お互いに魔法障壁を持つ魔法使いの肉弾戦は、魔法障壁と同時に相手の肉体を破

第三話 強敵は、魔女

壊する威力を持つ攻撃が繰り返される、言ってみれば二重の破壊をねらった戦いだ。
——ギインッ！

お互いの魔力が大きすぎるせい、想像以上の衝撃に腕が痺れそう。それなのに、魔女はまだ余裕があるようなのが悔しい。

(しまった——！)

ビリビリと痺れる腕に剣からの振動が伝わってくる。せっかく生成された剣が大きなダメージを受けたのがわかり、みことの顔から血の気が引いた。

剣の刃からポロポロとこぼれ落ちるように光の粒が落ち、溶けるように消えていく。

「くっ……。私の杖の魔法構成を……！」

呻くのは赤毛の魔女も同じだった。みことの前で二人の武器は見る見るうちに形を歪め、光の粒子となって消え失せていく。

彼我の魔力がお互いに打ち消しあい、魔術構成を維持できなくなったらしい。

「やるわね。武器はしばらくは使えない、か。それなら……これよっ」

マントを翻して距離を取った赤毛の美女が両手で印を結ぶ。みことにはまだできない、複雑な手印からまがまがしい風が吹いてくるような気がした。

(な、なんだ、これ——)

第三話 強敵は、魔女

ぞわり、と背筋の産毛まで逆立ちそうな危険の気配。魔力回路からの魔力をあわせて、必死に防御魔法を練り上げていく。

間に合うかどうかわからなかったけれど、今できる最大の魔力と技術を込めた。

「遊びがあること、期待してるわよ、お嬢ちゃんっ！」

ガーベラの口元がかすかに歪んだ。それが呪文だったのか、振りあげた腕が下ろされた瞬間、何か異様なものがみことに向かって放たれたのがわかった。

一瞬の間に、それが不可視の巨大な球体なのだとわかる。二人の間にあった木が、えぐれた。いや、消滅した。

ゴオオオ——ッ！

轟音とともに画像編集ソフトでいらぬ背景を無造作に消すように、あっさりと木の枝が、葉が消え失せていく。

（ヤ、ヤバいぞ。なんだよ、これ……キンケイド？）

家電のカタログにある断面図のように、木が、地面が切り取られ、切り取られた部分が消失している。

あまりに非現実的な光景だが、それがなかったら不可視の攻撃がまったく理解できないうまだったかもしれない。

（ディスプレイグレート……いや、ヴァニシング・ポイントだどっ！）

第三話 強敵は、魔女

悲鳴にも似たキンケイドの思考。純粹な魔力による防御以外を無効化する、ある意味究極的な攻撃魔法らしい。ただ、効果範囲に対してあまりに巨大な魔力を消費するため、使い手が皆無の魔法だという。それが、今みことを襲っていた。

魔力により、空間にある物質を切り取り、消失させる。対象を崩壊させて塵のようになんか解けるといふディスインテグレートとは違い、『対象は文字通りこの世界から失われる』。

あとに残るのは虚無、真空であり、消滅した対象を回復することはできない。轟音は失われ、虚無となった空間をうめようとする世界の対応と、流れ込む空気のみだ。

（なんだよ、そのチート技。ラスボスの技じゃあるまいしっ——！）

（馬鹿。そんなこと言ってる場合か。純粹魔法防御以外はほぼ無効だぞっ）

「と、とにかく防御っ。防御発動っ——！」

目に見えない、巨大な球体が襲ってくる。その軌跡と、真空になった空間がたてる異様な音だけが、事象の消失を示していた。

みことめがけて一直線に、地面が、木々がえぐられた反円状の溝や弧を描くラインが、襲ってくるモノが球状であることを雄弁に語っていた。

目に見えない球体が、空間にある物質を丸ごと消失させていく。

第三話 強敵は、魔女

吸い込まれていくような木の枝や葉の動きと音が真空状態が発生したことを示している。ヴァニシングポイント、消失点の魔法は、文字通り全てを消滅させる魔法らしい。

（消滅？ 爆発とか切断じゃなくて、本当に消えてるのか——っ！）
尋常でないことだけはわかる。危険なことも。とにかく、魔力障壁で守るしかない。

純粹魔力の攻撃であるため、物理的強化魔法などでは意味がない。魔力に魔力をぶつけて相殺するしかないのだ。

（自分の身だけを守れっ。ほかのことは考えるなっ。みことっ）

そういう間にも魔女の魔法の軌跡が近づいてくる。その魔力が通過したあとはモノが消滅する。空気も、地面さえもが消え、そのあとに空気がなだれ込む異様な音。

通過したあとには、ブルドーザーが通ったあとのような溝が刻まれている。

（わ、わかったっ。くっ————やっってやるさっ）

手を広げて構え、できるかぎりの魔力を防御魔法に注ぎ込む。何もなくなった空間に、空気がなだれ込む不気味な音。

空気すらも消失させる魔術の強力さと異様さに全身に鳥肌が立つ。腕に受ければ腕が、脚に受ければ脚が文字通り消滅するだろう。

第三話 強敵は、魔女

ゴウツ———！

溝というには異様にきれいに整った、「切断面」がみことに迫る。みことの周囲の空間が消失する不気味な音と、気圧の変化による耳の痛み。

そして、すべてを消失させる魔法と、それを打ち消そうとする防御魔法が真つ向から打ち消しあう衝撃が魔力障壁を通じてみことの腕を震わせる。

「うっ、うわっ——。ま、負けるもんかつ」

負ければ、目の前で幹を、枝葉を虚空に食われて失った立木のように、この体ごとどこかに持って行かれる。

必死であらうみことを中心に渦巻く空気の流れに髪が、スカートが、マントが激しくはためき翻る。

ゴオオツ———！

はあっ、はあっ、はあっ——。

ほんの一瞬のことはずなのに、驚くほどに消耗していた。額には汗が浮かび、上気した肌が大量に消費されたエネルギーを示している。

魔法少女の背後であの異様な音が遠ざかっていく。なんとかくぐり抜けたらしい。

(だ、大丈夫か？ まことっ)

(ああ、大丈夫——と、うわわっ。落ちるっ)

みこと——いや「魔法少女マコト」の足下だけを残し、周囲数メートルに渡り地面がえぐられていた。

島のように残った足下が崩れ、少年少女の体重を支えきれなくなったのだった。かろうじて自分自身と足場を守っていただけだったらしい。

落下の衝撃を膝と足首、そしてマントの風の魔法で打ち消して穴の底に降り立つ。

不利なのはわかっているが、この穴から出る瞬間をねらい打ちにされることだけはつきりしていた。

第三話 強敵は、魔女

(ま、まだやられたわけじゃない——っ)

半球状にえぐられた穴の中心でみことはさらに身構える。

魔力供給が絶たれたわけじゃない。クレーターのような穴から脱出するタイムミン
グを計りながら近づいてくる魔女の気配を窺う。

「あはははっ。魔法少女マコトか。そう名乗るだけの実力はあるようだね。ふふふ
っ」

かすかな足音とともに現れたガーベラの赤い髪が風の中に波打ち、まるで炎のよ
うだ。

穴の縁から見上げる魔女の姿は強大な魔力にかすかにゆらめき、不吉でありなが
ら美しく、幻想的ですらある。

「嬉しいよ、魔法少女マコト。このままがっかりさせないで欲しいわね」

すり鉢状、いや半球状に抉られたクレーター状の穴の底で姿勢を立て直す魔法少
女を見下ろす姿は絶対の自信と、興味深い獲物を見つけたという喜びに彩られてい
た。

艶やかな唇を湿らせるピンク色の舌が淫らで、思春期まっただ中のみことが思わ
ずひるんでしまうほどに色っぽい。

「うふっ。遊んで……あ・げ・る♪」

第三話 強敵は、魔女

どうやって移動したのか、次の瞬間には赤毛の魔女の唇が目の前にあった。跳びすさって逃げようとしても、穴の底では逃げるだけの場所がない。

チュッ——。

一瞬の逡巡が致命的だった。魔女の唇が魔法少女の首筋に触れてしまっていた。

「な、何を……」

腕について突き飛ばそうとしても間合いが近すぎる。しなやかな魔女の腕が魔法少女を抱きしめ、首筋に吐息を吹きかけられると、こんなときにも関わらずビクン、と大きく身体が震えてしまった。

「うふふつ。知ってるのよ。魔法少女は全員、敏感なコばかりだって……」

そのまま、首筋や頬に唇を押しつけられると、身体はその一つ一つに過剰に反応してしまう。

ビクン、ビクンと筋肉が痙攣し、背筋がゾクゾクするのをなんとか押さえ込むことだったが、耳元で囁きかける魔女の言葉に首をすくめてしまった。

「あなたはどうかしらね？ 魔法少女マコト。ずいぶん感じやすいみたいだけど」

「ふ、ふざけるなっ」

なんとか腕をふりほどいたものの、あまりに空間が狭く、間合いを取ることができない。敏捷性を生かすことができないまま、魔女の戦術にはまってしまったこ

第三話 強敵は、魔女

とを思い知らされる。

(う、上に逃げるしかないっ)

周囲を地面に囲まれた空間ではみことの得意な風の魔法は力が弱い。地上に逃げられないが、それは魔女の予想の範囲だった。

マントに風の力をこめてジャンプしたところを足をとられてしまった。魔女の力は意外なほどに強く、上昇力を完全に殺されてしまっている。

「キンケイドはどこ？ 近くにいないんでしょう？」

片方の手で足首を捕らえたまま、太腿をそろりとなで上げる。それだけで内腿の筋が痙攣する。魔女の手は自動発動の魔法を備えているようで、触れられるだけで白い肌にざわめくような快感の波紋が生まれ、身体に広がっていく。

「お、おまえなんかに教えるもんかっ。……くそっ、触るなよっ」

マントをはばたかせて脱出しようとするが、先ほどの魔法で周囲の魔力まで失われてしまっているようだ。マントにより発動する飛翔の魔法の力も弱まっている。

宙に浮いたままの少女の足を包むタイツごしに、魔女の手がさわさわと撫であげてくる。身体をひねりながら脱出しようとするのに、空中では力が入らない。

「あなたより、守護獣キンケイドのほうが重要なのよ……って、みいつけ、たっ！」
舌なめずりしながら赤髪の魔法使いの腕がひらめき、魔力が放たれる。

第三話 強敵は、魔女

(しまったっ——！ 逃げる、みことっ)

ちようど半球状の穴の縁からみことの様子を窺っていた小さな生き物がロープにからめ取られていた。それを引き寄せた魔女が怪訝な表情をする。

「……なに、このヒヨコは。使い魔にしても小さいし、間抜けな顔ねえ」

「キンケイドを放せっ、このっ、このっ」

手足をじたばたと動かすと、意外なほどにあっさりと解放された。魔女もこの状況は予想していなかったらしい。

「……えっ？ キン……ケイ、ド……って」

目を丸くして手の中に収まった小さなぬいぐるみ状の物体を見つめている。

「キンケイド？ これが？ 黄金の守護獣、日輪の使者キンケイドだというの？」

「そんな格好いい名前は知らないけど、とにかくキンケイドを解放しろっ」

みことと手の中のヒヨコを交互に見つめたガーベラの口元がゆがんだ。弾けるような笑い声は実に豊かな声量だ。

「あっははははははっ。太陽の化身とまで言われたキンケイドが、このざまとはねっ」

「なんとでも言え。オレは後悔していない」

ロープで拘束した小動物を手の中に収めた魔女が憎々しげに舌で唇を湿らせた。

「……幾人もの魔法少女を死に追い込んだ災厄が、よく言うわね。キンケイド……」

第三話 強敵は、魔女

「くっ。殺したのは貴様たちだろう。よくもその口でっ」

因縁があるのだろうか。二人の会話はみことにはまったくわからない。わかるのは二人の間に強烈な敵意があることだけだ。

腕を延ばし、長身のガーベラから取り戻そうとするが、魔女は軽々とそれをかわして笑う。

「おっと、お嬢ちゃんにこれを渡すわけにはいかないねえ」

「キンケイドを放せよっ」

「あらあら、わずかな間にずいぶんと……いいわ。取引しましょうか」

「だめだつ、マ、マコトツ。こいつらと取引なんか……ぐ、ぐああつ」

ぬいぐるみのようにふわふわしているヒヨコの身体に細いロープがくいこむ。ふわふわのぬいぐるみが見る見るうちに拘束され、ぐるぐる巻きにされてしまう。

「取引って、どんな取引をするつもりなんだ？」

「二十分、私の攻撃に耐えたら、この珍生物を解放してあげる」

くるくるとヒヨコのくちばしをロープでぐるぐる巻きにしながら赤毛の魔女が舌なめずりするのがどこか淫らだ。

その一方で、ロープに魔法の力があるのかキンケイドの思念が遮断されてしまったように、呼びかけが通じなくなっていた。

第三話 強敵は、魔女

「もちろん貴方も攻撃していいのよ。ただし、武器は使わないし、傷をつけたらダメ」

「どちらかが気絶したり、降参したら、相手の勝ち」

指を折りながら条件を挙げていく美女の顔は相手を追いつめる愉悦の表情に満ちている。

「私が勝ったら、あなたは私のモノ。あなたが勝ったら、コレを返す」

にっこりと笑う唇がやけに艶やかで背筋がゾクリとする。指さされた金色のヒョコが縛られたクチバシの下から必死に訴えかけようとしているが、思念を遮断されてしまつ、何を言っているのかはわからない。

「肉弾戦ってことか？」

「そうね。後に残る損傷とかはナシよ。そういった攻撃魔法も、魔法障壁もナシ」
みことの魔法を発動寸前で無力化するガーベラの魔法障壁がなくなるのは、悪い条件ではないはず。そして、伯父たちに鍛えられた体術には多少の自信があった。

「わかった。その勝負、受けたっ」

「うふふつ。成立ね。戦場は、この穴の中。勝負がつかなければ、出られないわよ」

魔女の作り出した魔方阵が光を放ちながら、柔らかそうな掌の中に消えていく。

それと同時に消失魔法でえぐられた穴の中が結界となり、二人の魔法使いを封じ込

第三話 強敵は、魔女

める。

外の世界とのつながりが遮断され、気配が感じられなくなっていた。

「デスマッチってことか……」

「当然よ。魔法少女マコトの名前を継ぐものは、叩き潰させてもらおうわ……!？」

瞬間、魔法少女の姿が消えていた。いや、低すぎるほど低い姿勢からの急加速だ。視界から消えたままに間合いをつめ、身体をひねりながらの一気に蹴り上げる。短イスカートが翻り、長い髪もくるりとなびくのが美しい。

（一撃で……決めてやるっ）

奇襲で一気にかたをつけるしかない。絶妙のタイミングで打ち込まれた足先はガベラの側頭部を打ち抜く直前で強靱な壁にぶちあたり、瞬間的に発生した電光が少年少女の下半身を撃った。

「うああっ！ くっ、くそっ。魔法障壁はなしじゃなかったのかっ」

臓腑を引き絞るような苦痛に下肢を痙攣させながらも、なんとか受け身をとり、手をつきながらも体制を整える。

舌の根も乾かぬうちの裏切りに、まっすぐな性格の少年少女の瞳は怒りに燃えていた。

「あら、こわいこわい。肉体を傷つけるような攻撃は禁止とあったのにねえ」

第三話 強敵は、魔女

「ど、どういうことだっ」

ふわりと軽やかなしぐさで一気に近づいてくるのを、転がるようにしてよける。のばされた優美な腕の先で、魔女の指が明らかに関節をとろうとしていたことに首筋の毛が逆立つ。

「要するに、相手の身体を傷つけずに、降参させればいいってことよ」

ハメられたことに気づいたみことが唇をかむ。

パンチやキックでダメということは、ほとんどの打撃技は使えないということだろう。とすると思いつくのは関節技や絞め技だが、どちらも得意ではないのだ。

(まずい。距離を……)

下半身のしびれが残っているため、普段の瞬発力が発揮できないでいる魔法少女の細腰に、魔女のしなやかな腕が巻き付いた。脚をばたばたさせて引き離そうとするが、もともとの腕力が違いすぎる。

「すごい。まだこんなに動けるのね。苦痛には強そうだけど……これはどうかしら」
後ろを取られてしまったみことの耳元にささやかれる、艶やかな低めのアルト。その吐息が敏感すぎる魔法少女の耳朶をくすぐる。

こんな非常時すらも、魔法少女の肉体は敏感さを失っていないのがうらめしかった。

第三話 強敵は、魔女

「ひやおっ……な、何をするっ。うっ、うああっ」

耳たぶに吐息をふきかけるだけでなく、唇が首筋を這い回る。それだけで全身の肌が粟立つほどの快感が少女を襲っていた。

「くふうっ、んんっ、やめろよおっ」

肌が震え、快感の振動が身体と共鳴しながら広がっていく。

「魔法少女には、やっぱり快樂責めが一番ね。可愛がってあげるわ」

身体が精神と乖離した一瞬、手首をとられたことにカラダが警告を発する。

「な、何をっ。放せっ」

「あなたなら、知っているでしょう。カラダの構造をね。ほら、こうすれば……」

体格差もあり、抵抗力を発揮できないでいるうちに、左手をとられてしまった。

背中側で腕をひねられ、肩と肘が危険な角度に固定されてしまう。背中側で密着され、すぐに反撃できない状態で、さらに唇が首筋から耳たぶへと移動する。

「動けないでしょう。その状態で敏感なカラダをくすぐられたら……」

腕一本で魔法少女の抵抗を封じたガーベラがねっとりとした口調で囁きかける。

耳元で、吐息までも組み合わせた口調に背筋がゾクゾクしてしまうのが口惜しい。

「やつ、やめろっ。んんっ、ひやつ、ひゃふうっ」

このままさらにひねられたら、関節が破壊されるかもしれない。先ほどの消失魔

第三話 強敵は、魔女

法の時とはまた違った恐怖がみことを襲った。首筋を、うなじのあたりにまで唇が這い回る快樂と、左腕を壊される恐怖がゆさぶりをかけてくる。

「大丈夫よ。これ以上はルール違反だもの。そのかわり、こうしちゃうの」

関節の破壊は魔女自身の課した『傷をつけない』という制約にひっかかるらしい。解放されたみことの左腕は、背中で固定されてるだけだった。

よりによって自分のマントの生地で縛られていることに気づいたみことの顔が真っ赤になる。しかも、左腕がちょうど力の入らない角度で固定されてしまっていて、すぐには解放できそうにない。

「な、舐めたまねを……許さないっ。許さないぞっ」

「くすくすっ。舐めるのも舐められるのも私は得意なのだけれど」

屈辱と怒りに顔をゆがめながらも、改めてガーベラの実力を思い知らされるみことだった。

魔術だけでなく格闘術でもかなりのもので、しかも、完全に相手のペースに乗せられている。

「舐められるのって、とつてもキモチいいのよ、マコト」

「ふざけるなっ。……さ、触るなっ」

片腕を不自然な状態で固定されてしまい、普段の動きができない。今度は簡単に

第三話 強敵は、魔女

捕まってしまった。

残された右手をとられまいと必死に守るみことだったが、逆にほかの部分の防御が甘くなってしまう。

「いいじゃない。女の子の身体はそういう風にできていること、教えてア・ゲ・ル♪」

ぴつとりと背中から身体を密着させてくるガーベラの豊かすぎる胸が左腕に、肩に触れる。その量感たるや、今まで感じたことのない圧倒的なボリュームだ。

（うっ、うわっ。なんだこの柔らかさ……まるで包まれるみたいだ）

母や姉もそれなりに豊かな身体を持ち主で、抱きしめられたりすると戸惑うほどだったけれど、魔女の乳房は見事な砲弾型だ。

むにゅっ——。

押しつけられると柔軟に細身の少年少女の腕や肩に密着し、ふっくらと包み込んでいくようだ。

「うふふっ。ウブなのね。可愛いわよ。お姉さんがイロイロ教えてあげる……」

「断固拒否するっ。ぼくから離れろっ」

拒否しながら魔女を振り切ろうとするのだが、魔女の身体は柔らかいくせに強靱で、片手ではとても引き離せそうにない。

第三話 強敵は、魔女

逆に引き寄せられさらに身体を密着されてしまう。ぴつとりと押しつけてくる魔女の太腿や下腹部の感触までもが伝わってきて、童貞少年のみことの精神を揺さぶってくる。

（くっ、くそっ。こんな……すべすべして、柔らかくてっ）

「抵抗してもいいのよ。できるものなら、ね」

背中側から抱きすくめるかたちになった魔女が、左手を魔法少女の胸に触れる。

それだけでびくん、と少女の細い身体が反応するのに唇を歪めながら魔女が指を広げ、豊に膨らみながらも魔女に比べれば慎ましい胸のふくらみに這わせていく。

それだけでぞわぞわと肌が粟立ち、肉悦の波紋が身体に広がっていく。

「うっ、んんっ……や、やめろっ、こんなの……」

「あら。まだ始まったばかりなのに、もう降参かしら」

プロテクターを避けるようにして胸の膨らみを包み込むとやわやわともみ上げる。それだけならばまだいいが、巧みになで回しながら、乳首周辺をひっかくように刺激してくるのがたまらない。みるみるうちに感じやすい器官が突起してしまい、さらに敏感になってしまいう乳首が恥ずかしく、そして悔しい。

「このおっ。ふざけるなっ。それを……や、やめろっばあっ」

魔女の手が動くたびに腰の奥に熱がこもり、恥肉が疼く。魔女の右手を必死にな

第三話 強敵は、魔女

って押さえながらもくみことだが、突起した乳首を周辺の爪でなぞられ、言葉の最後で力が抜けてしまった。

それほど敏感な魔法少女の感覚に食い込んでくる肉悦の信号は強い。魔女の色責めは、乳房への蹴りひとつとっても新参の魔法少女の経験では太刀打ちできないほどに巧妙だ。

「胸のカタチもいいし、すごく綺麗な身体。しかも、この魔力からして、処女ね」

「なんでそんなことわかるんだよっ。この変態っ。胸から手を放せてばっ」

コスチュームの上から乳首を探られ、輪郭をなぞられる感覚が想像以上にきつい。

乳首の細かな凹凸まで確かめるような指先の動きが、綺麗に手入れされたピンク色のツメの動きがコリコリとした感触となり、胸の中心を震わせる。

「もちろんわかるわよ。男女問わずにね」

敏感に尖ってしまった乳首への強いけれど強すぎない、もどかしい中途半端な刺激だ。それだけに、身体の奥が刺激を求めているのが自覚できてしまうのが恥ずかしい。

「処女性というのは魔術的にはかなり重要なよ。香りもけっこう違うし」

右手は敵の手を押さえつけるのに必死で、左半身は事実上魔女のなすがままだ。

魔女の指が乳房にからみつき、なでまわしたりこねまわすのを、唇を噛んでやりす

第三話 強敵は、魔女

ごすしかない。胸のふくらみ全体が熱を持ち、柔肌が身をくねらせたような感覚にざわめく。

「さすがにキンケイドの選んだ魔法少女。装束の防御力も大したものねえ……だけど」

後ろから耳元に囁きかけてくるアルトの声に、耳元までもが鳥肌が立つ。耳たぶまでもがじんじんと疼き、何かもう少しの刺激がないと物足りないようなもどかしい感覚に唇を噛む少女の呼吸が途切れ、全身が震えた。

「はううっ」

ペロリ、と首筋を舐められた瞬間、全身が硬直してしまうほどの、電撃のような快感信号が神経を駆け抜けていく。幾度も受けたら身体から力が抜けてしまいそうだ。

「この私にかかければ、ないも同然ってこと」

「なっ、何をするっ」

乳輪をなぞるように、ちりちりとロウソクの炎であぶられるような熱感が生じていた。意識を集中すると、魔法少女としてのコスチュームに魔女の魔力が作用し、生地を焼き切っていくのがわかった。

体験版はここまでです。お楽しみ頂けたら幸いです。

**魔法少年少女みこと!? 第一巻
立ち読み(体験)版**

著者 巨道空二
イラスト・デザイン Maruto!

発行日 2022年5月25日

© 巨道空二・Maruto! 2022

魔法少年少女

MAHO
SHONEN
SHOJO

みこと!?

MIKOTO !?

①